
公がチートな女性たちとクランを組んで。そして、いつのまにやらハーレムになっていくお話

診見 観身

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VRMMORPGの世界でチートな主人公がチートな女性たちとクランを組んで。そして、いつのまにやらハーレムになっていくお話（題名仮：題名が長い！）

【Nコード】

N3966Y

【作者名】

診見 観身

【あらすじ】

VRMMORPGにログインしようとしたのだが……なぜかVRMMORPGの世界にいた。

しかも、そこでログアウトできず。

二つの陣営に分かれて死をかけたサバイバルゲームが始まった。

巻き込まれたのだが、その時に一人の女のプレイヤーに会ったことから、

協力することになり動き出す物語。

生き残るために様々なことをして、増えていく仲間たちと思ったら女の子ばかり。なぜか勝手にハーレム状態になる主人公。

RPGの能力をそのまま引き継いだ主人公がチートな感じです。チートでハーレムが苦手な方は遠慮してください。

体の一部が欠損する表現などが出てくるので苦手な方は遠慮してください。チートハーレムVRMMO物です。ヒロインの女性たちもかなりのチートです。

プロローグ

二十一世紀が過ぎて数十年たった日本。

そこでは、VRMMOが世の中に出回っている。

最寄りの接続場所に行けばすぐに入れるゲーム世界として有名だった。

普及しているかのように思われているがそこには影の部分があつた。

ここに、VRMMORPGにログインしようとした一人の男の姿がある。

高校に通っている美濃^{みの} 雅一^{まさかず}は、今日もいつも通りにRPGの世界に入っていくつもりだったのだが……

「さて、ログインしてっ」と

雅一は、VRMMORPGに入っただつもりだった。

「……なんじゃこっちはー!」

雅一が最初に現れた光景は、崩壊したビル崩れかけの家などのごく

ありふれない風景だった。

「あれ……俺、来る場所間違えたのかな？」

辺りを見渡してみるとそんな光景が続いている。

しかし、雅一は、自分の格好を見てみるといつもRPGで使っている装備だった。

「これどう見ても……俺が使っている剣だよな……新しいステージでもリニューアルされたのかな……？でも、中世ファンタジーの世界では、これはいくらなんでも運営側がおかしいよな……」

雅一は、いつも緑あふれる森の中などでゲームをしていたはずだった。

モンスターを倒したりクエストをクリアしたりしていたはずだった。

雅一にとつたらこの光景は異常だ。

「しかたない、ログアウトしてみるか」

ログアウトするために、MCDを取り出す。

MCD・・・正式名所でメニューコンソールドライブというVRM MOでは、誰もが持っている物だ。

それを使って道具やお金を確認したり、ログアウトしたりする装置だ。

「あれ……できない……こわれたのか。いやここに壊れ何という概念

「はいはずだからありえないな」

MCDのログアウトボタンを何回も押すがログアウトできなかった。壊れているということも考えたのだが、あくまでここはヴァーチャルであって壊れるといことはありえないのだ。

「何なんだよ!!」

一人で叫んでいた時に、RPGでは絶対に聞こえない銃撃の音が聞こえた。

『バン、ダン、ドドドッ!』

「何だ!?何だ!?!」

雅一は、銃撃の音を不思議に思っ近づいてみると、一人の女の人
が、4人の軍服を着た人たちと銃撃戦をしていた。

その女の方は、160?ぐらいで胸が大きく、白いのタンクトップ
を着て、下はオレンジ色っぽい茶色のズボンをはいている。

そして、オレンジ色の髪の毛を後ろでまとめている。

たぶん、高校生ぐらいだろうと雅一は思った。

そんな女の方が銃の形からAK 47らしき武器で応戦しているの
を雅一は見た。

何が起きているのかわからなかったのだが、とりあえず助けること
にした。

「いくらなんでも、一人で四人と戦うのはきついだろう。」

そうして、雅一は走った。

たとえ銃を持った相手でも四人ぐらいならどうにかなるだろうと思った。

「ほら、こつちだ!!」

雅一は、一人目の軍服の奴に横から奇襲をした。

「一人目!!」

軍服の奴は、一人倒れたが、3人ともこちらに気付いて銃を撃とうとしたのだが。

「スキル、迅雷」

雅一は、瞬間的に一人の軍服の奴の懐に入り。

剣で切る。

雅一が使ったスキル“迅雷”は、素早さを高くすると使えるスキルで相手の目を錯覚状態にさせる事が出来る。

敵は、ずっとそこにいるかの様子に見せかけて実際は、動いているという、目の錯覚を使ったスキルだ。

慌てている、他の奴にも切りかかり

「最後に、終わり！！」

最後の奴にも切りなかった。

雅一は、四人の銃を持った敵を倒してしまった。

「意外に楽勝だったな…」

倒した後、戦っていた女の人がいた方を見たときに

「いない…？」

『力チャ』

そして、後頭部に銃を向けられた感覚があった。

「あなたは、何者？」

そう、冷たい声で訊かれたのだ。

1 下ろされる銃 衝撃の事実

「あなたは、何者？」

雅一は、動けないでいた。

たとえ、当たっても死ぬわけではないのだが。

V R M M O は、実際に少しの痛みを感じる。

痛覚に、電気信号を送って擬似的にダメージを与えるのだ。

R P G や、他のジャンルは低めで設定されているが。

F P S は若干高い。

頭に撃たれるということは結構痛い。

そう思っている雅一は、動けないでじっとしていた。

やがて、相手が話しかけてきた。

「もう一度聞くけど、あなたは誰？所属を言いなさい。」

「俺は、ただの通りすがりの英雄で…」

『トン』

銃を頭につけられた雅一はビビる。

「最後のチャンスを与えるは、あなたの名前を教えなさい。」

最後のという部分に過剰に反応した雅一はあきらめて、

「俺の名前はミノマサだ。本当はR P G にログインしたはずがこん

なとこにいてたまたま襲われているあんたを助けたただけだ！」

早口に一気にしゃべった。

ミノマサと言うのは、ゲーム内での名前で、ただ名字と名前の最初を合わせただけの普通の名前だと雅一は自負しながら言った。

「ミノマサ……聞いたことない名前ね。あなたぐらいの強さなら有名になっていてもおかしくないのに、しかもファンタジー凶なのに……」

ファンタジー凶というのは、FPSの世界でいかにもRPG的な服を着てナイフなどを武器にして戦う奴らの事だ。RPGの中にも、ミリタリー凶がいて、迷彩服や銃っぽい武器を持っている。

「だから、言っているだろ！RPGにログインしようとしたけど何かここにいるって！」

未だに銃を頭から話してもらえていない状況から必死に説得する雅一。

「なら、ここのゲームの名前と今の陥っている状況の知らないのね？」

ちよつと緊張が和らいだ声で言ったために安心しつつ雅一は言った。

「ああ、もちろんだ。たぶんお前たちの敵にもならないだろうし、攻撃もしない！」

「まあいいわ。“でも”、手は上にあげたまま！」

銃は、頭から外されたが、彼女の言うことを聞くことにした雅一は手を挙げたまま振り返った。

「やあ。」

たしかに、先ほどまで戦っていた女の人がそこにいた。しかし、彼女は銃をこちらに向けたままだった。

「あの〜銃を下ろしてもらえませんか……？」

弱弱しく下から目線な感じで雅一は尋ねる。

「まだ、私はあなたの事を信用していない。さあ、MCDを見せなさい。」

「あの〜手が使えないと出せないんですけど……」

雅一は手を挙げたまま腰にあるMCDをとれないでいる。

「わかったわ。まったくめんどくさい男ね。」

そう言つて、雅一に近づき腰にあるMCDを奪う。

「乱暴だな」

彼女は雅一の言葉も無視し、銃をこちらに向けながらMCDを触っている。

「器用だ……」

数分もしたら、雅一の方に向いた。

「本当の事みたいね。まずは、あそこの建物の中に行きましょう。
…いい人材をゲットしかも」

彼女が指をさした建物の中に行こうと歩き出す。

しかし、雅一は最後の言葉をうまく聞き取れなかったのだ。

「やっとわかってくれた…」

「早くいきなさい。」

「は、はい！」

雅一はやや駆け足気味に建物の中に入って行った。

3階建ての中の一階部分にそうとうする所に二人とも入って行った。
まともな原型をとどめておらずボロボロの建物の中で、彼女は銃を下ろした。

「自己紹介まだだったね。私の名前はカノン。『月下の灯』という
クランのリーダーをしている。」

銃を下ろして、出っ歯ているコンクリートの上に腰を掛けたため、

雅一もそうする。

「カノンな、よろしく。それで、今の状況を教えてくれないか？」

そして、彼女の口から衝撃的な事実を聞く羽目になる。

「ここは、VRMMO FPS、ガン・カウンター・テロと言うゲーム。そして今、命を懸けた“サバイバルゲーム”をやっている。」

1 下ろされる銃 衝撃の事実（後書き）

評価、感想など待っています。

2 事実の説明 GCT説明

「ここは、VRMMOFPS、ガン・カウンター・テロと言うゲーム。そして今、命を懸けたサバイバルゲームをやっている。」

「……はっ！命を懸けたサバイバルゲーム？」

カノンは、雅一に事実のみを伝える。

「ガン・カウンター・テロって。最近話題のFPSか！」

雅一は、ガン・カウンター・テロ。

GCTの存在を思い出す。

VRMMOFPSの中でもかなりのリアルティを追求して、乗り物とかに乗れる、とかそういう宣伝をしていたことを思い出した。

「そう…たぶんあなたが思っているのであっているはず。それで、ガン・カウンター・テロやったことある？」

「いや、宣伝で知っただけで、やったことがない。そもそもFPS自体、2〜3年前にちよつとやってただけだから」

雅一は、ここ1〜2年ずっとRPGをしている。

そしたらRPGの方がやばいレベルになったのだ。

「なら、簡単に説明するわね。ガン・カウンター・テロは、日本を舞台のFPS。年は、201X年の設定でまだ冷戦が続いている。そして、私たちプレイヤーは正規軍か、解放軍かを選べる。それぞれバックに大国がいて、正規軍にはソ連。解放軍にはアメリカがつ

いているの。このゲームの面白さは、なんといつても乗り物に乗れることと水の中に入れたり、パラシュートで降下できるのよ！すごいと思わない！？それぞれ、バツクの国からの任務をこなしていつてレベルを上げたりするの。」

「ああ……」

簡単に説明するところがすごい長く説明されて唖然としている雅一に追い打ちをかける。

「それで今の状況は。今日は1周年記念と言うことで何やらイベントがあると告知されていたの。それで、みんなログインしてきたらいつもと違う場所にいて。そしてたら急に変な人が現れたの！この世界の神だという人が。そしてその人が正規軍と解放軍、それぞれ1万人に分かれてサバイバルゲームを開始します。この世界では、ゲームオーバーになったら、“死”を意味します。それでは、頑張ってくださいねって言うてきたんだよ！」

「ああ……」

カノンは雅一にさらなる機銃掃射並みの口撃を開始する。

「それでそれで、いざゲームの中に入ったと思ったら、クランメンバーの子たちと別れちゃうし、それで、あゝどうしようと思ってる、NPCの奴らに襲われて君に助けられたっていうわけ。理解できた！？」

「ああ、もう完璧だ。」

雅一は、これ以上聞きたくなかったためにまだ聞きたいことはあつ

たのだがやめておいた。

「そう…それで状況の確認はできた!？」

「ああ、サバイバルゲームが始まってゲームオーバーになると死ぬって…………死ぬ!!!??？」

雅一は、改めてカノンの言葉に疑問を持った。

「死ぬ!？」

「そう、死ぬみたいなの…だから、あなたに協力してほしいの速くランメンバーを集めないと、死んじゃうかもしれない。だから助けて!」

カノンは、このチート級の奴を手元に置きたかったただけだったのだが、雅一は本当に助けてほしいと思って

「わかったよ。どうせ出られないんでし、誰かと一緒の方が気が楽だしな」

「やった!!それじゃあ、まずはMCD貸して。GCTのデータをインプットするから。」

「ほい!」

MCDを渡す。

そして、数分後に

「これでよしと。これから君は、解放軍で月下の灯のメンバー。よろしくね」

カノンは雅一に握手を求める。

「ああ、よろしくな。」

彼女の手は、暖かく柔らかいと雅一は思った。

「それじゃあ、まずは一番近くにいるシマケンの回収からね。」

MCDで、地図を確認しながら言う。

「シマケン?」

「私たちの名ドライバーよ!」

そうして、二人はシマケン!?を探しに戦場に出るのであった。

3 カノンの実力 銃を手に入れる

二人は、ビルや家などを伝って慎重に行く。

「ところで、ここが日本ならここはどこなんだ？」

一戸建ての家の塀の後ろに隠れて雅一は尋ねる。

「ここは東京都と神奈川との県境あたりよ。そして、シマケンはある自動車会社の工場にいるみたい。」

そう言つて、MCDの写っている地図を見せる。
確かに青色の点滅が光っている。

「今、無線をむやみに使えないの。あつて、MCD同士でじかに接続しないと盗聴の恐れが高くなるから。それで、暗号を送ったのKEWつて」

「KEW？」

二人とも塀にもたれかかり呼吸を整えている。

「KEW。ケース、エマージェンシー、ウェイト。緊急の時に使う暗号で、とにかく動いて味方と合流してつていう意味。」

「なるほどウェイトはおとりだな。」

「そう。味方と合流することを第一優先にする命令で、ラッキーな事にみんなこの東京都と神奈川県の県境に集まっているから、簡単

に合流できるはず。シマケンは、運転が上手だから、すぐに車を確保したかったのじゃない。自動車会社の倉庫にでも立てこもっているんじゃない。さあ、休憩終了。進むわよ。」

「おう！」

そうして、少しずつだが進んでいく。

そして、川沿いの堤防の一手前まで来る。

「ストップ」

カノンは、突然手を横にだし、小さな声で言う。

そして、ハンドサインかなんかのだろうが、親指を立てて指をさす。

雅一は、その方を見てみると、二人の軍服の男が立っている。

カノンが動き出す。

しかし、雅一にはハンドサインで知らせる。

両手を交差させてばってんを作っている。

たぶん動くなという意味なのだろうと解釈して

雅一はうなずくとカノンは動き出す。

二人は堤防の下の住宅街との間にいて、周りを見ながら監視している。

そこへカノンは背後から少しずつ近づいていく。

木の後ろに隠れた。

そして、石を持って自分がいる位置とは反対側へと投げる。

『カラン』

二人はすぐの音に反応すると同時にカノンが飛び出して、一人目を首にナイフを当てて切り殺す。

そして、もう一人の男が振り向こうとした瞬間。

カノンは相手の口を押えて、眉間にサイレンサー着きの拳銃を当てて静かに撃つ。

『パス』

音と共に男が倒れる。

「来ていいわよ。」

そう言葉があつた後に雅一は、カノンのそばに行く。

「NPCね。」

「何でわかるんだ？」

NPCにも関わらず消えていなく倒れている。

しかもしっかりと鮮血を見せている。

「一言もしゃべらなかつたし、こんなところでボサッと突っ立っているのは、NPCか、芋ぐらいしかいないわ。」

芋というのは、その名の通り、地中に埋まっているように動かないことの意味が変わって、とっても下手なことをあらわす言葉だ。

「でも、さっきのは鮮やかだったな」

「そう、ありがとう」

簡単に一言述べて、カノンは、二人の男のベルトなどを取る。

「ラッキー、AKの弾薬があつた。それに手榴弾とスモークもある。それにあなたに」

そう言つて、拳銃を投げてきた。

「もしものため護身用よ。拳銃はないよりあつたほうがまだから。」

「ありがとう」

雅一は、久しぶりに拳銃を持つ。

でも、昔雅一がやっていたVRMMFPSとは、似ても似つかなく。

とても精巧にできており、重量もしっくりくる感じた。

「それは、MP443通称グランチ。NATOの弾薬とも相互性があるし、意外に弾薬が多いから使い勝手のいい銃ね。」

そして、ホルダーも渡してくる。

「そっぴー何でお前ってAK使ってるの？解放軍のバックはアメ

リカ何だから銃弾とかに困るだろ？」

AKと言うのは、元々ソ連が開発したためにアメリカなどと弾薬の相互性がない。

「それは、やっぱり使いやすいからかな？でも、任務によっては変えることが多い。だって、AK 47はバラムキ専門だもん。」

AK 47は、命中率が極端に低いが、当たった時のダメージ大きく。

扱いやすさや耐久性などがいいためテロリストなんかには好まれる銃だ。

「そついや、どうやって、武器を手に入れるんだ？」

雅一は、ここに来てから人の住む気配をまったく感じなかった。

「まあ、その説明はおいおいするわ。この銃を持っているわけは、ただ前にログインして使っていた武器がそのまま今回のログインに反映されたみたい。だから仲間が集まったら武器の補充をしないとね。」

「そうなんだ。」

雅一はカノンが説明をはぐらかしたのは気に入らないと思ったが仲間に出会う方が先だと思って頷く。

カノンの実力がしれたいい機会だった。

二人は、まだまだ先へと進んでいった。

3 カノンの実力 銃を手に入れる（後書き）

銃を本格的に登場し始めたのですが、

くわしく説明するかどうしようか迷っています。

もし、銃関連でわからないことがあったら、検索して調べることをお勧めします。

なるべく、銃の知識がない人でも楽しんで読んでいただくように努力します。

4 切り込み シマケンの正体

二人は、少しずつ進んでいった。

しかし、敵と遭遇することなく、目標の工場へとたどりついた。

「ようやくか」

雅一はちよつと背伸びをするのだが

「伏せて！」

その言葉を発した後カノンは、雅一を無理やりしゃがませる。

「どうしたんだ？」

小声で聞く。

「何か、向こうにある2つて書いてある倉庫で人の音がするの」

「本当か？」

足音すら聞こえていない状況で迷っている雅一だったのだが、

「さあ、あなたの出番よ。」

「俺に何させるんだ!？」

「ちよつと様子見てきてくれない？」

親指は2と書いてある倉庫を指さしている。

「ああ、わかったよ」

「私も後ろから付いて行くから。」

雅一は、近づいてみると軍服の男が三人立っていた。
そして、ドアを開けようとしている。

「今がチャンスだな。カノン一人は任せる。お前が発砲したと同時に俺は突っ込むから。」

「了解」

気づかれないように近づき50メートルを切ったところで、カノンがAK 47から銃弾をまき散らした。

「ほらほら！こつち！」

そのバラマキで一人が倒れて二人が体勢を立て直し銃をこちらに向けてようとした時に雅一が動いた。

「スキル疾風」

スキル疾風と言うのは通常の移動速度を1.5倍上がるスキルだ。

そして、雅一は、一人目の奴の心臓部分をぶっさし倒れかけて横に

なっていると同時に、さつき手に入れた拳銃グランチをホルダーから抜き取り。

『バン、バン、バン』

三発銃弾が飛ぶ。

その内二発が胸と腹部に直撃して倒れる。

その後カノンが、頭に鉛弾を撃ち込み完全に沈黙させる。

雅一は、倉庫のドアを開けて中に入って行くと。

「止まりなさい。」

その手には、MACを持った女の子が立っていた。

雅一はつくづく女の子に狙われるのが趣味らしいと思ってしまう。

身長は150? 前半くらいで胸が少し大きく、赤髪のショートの子だ。

「あの銃を下ろしてもらえませんか?」

雅一は、カノンと同じように下から目線の言葉で話しかける。

「あんだ、誰かって聞いているの!」

「俺はですね。ミノマサと言うプレイヤーでしてね。今は月下の灯

というクランメンバーなのですよ。はい。」

なるべく、丁寧に話したつもりだと雅一は自負する。

「月下の灯… っでも、あんたみたいな男はいなかったはず。」

女の子は月下の灯と言う言葉に反応している。

その時にカノンが中に入ってくる。

「その人、新しく入った人だから。」

カノンを見た瞬間女の子に安心感に包まれたような雰囲気になる。

「そうなんですか？それなら許してあげる。」

「許してあげるって」

この女の子の性格をだいたい把握できた雅一だった。

「この子がシマケンよ」

「えっ！名前からして男じゃないの？」

雅一はずっとシマケンを男だと思っていた。

「それは、兄貴のIDです。たまたま兄貴が途中で放置したこのIDを借りてやっていましたから。できる限り。シマリと呼んでください。」

「ああ、わかったよシマリ」

そうして、二人はシマケン…シマリと合流できたのだ。

「次は、アカネとキリとの合流ね」

カノンはMCDを見ながら言う。

「シマリ。車の確保はできた？」

シマリは、自慢げな顔になり

「もちろんです。こっちに来てください。」

そこには、高機動車があった。

高機動車と言うのは、陸自が配備している人員輸送用車両の事だ。

「さすが。シマリ！これでこれからの移動が楽になる。後、敵さんからの土産もあった。」

そうして、カノンは銃、弾薬と手榴弾を持ってくる。

「銃は、AK 47が二丁と、あとRPKにその弾薬の75連ドラムマガジンも二つもあったわ。これで、軽機関銃を使う事が出来る。」

RPKとは、軽機関銃で75発撃つ事が出来るソ連の銃だ。

「それでは、二人とも行きましようか。シマリ運転よろしく」

そうして、銃などを持って高機動車に乗り込み。

シマリがエンジンをふかして、倉庫から走り去った。

新たに増えたシマリと共に二人との合流するポイントに向かうのであった。

5 二人の戦闘 二人の合流

3人は高機動車に乗り

廃材やコンクリートの破片をよけつつ進んでいった。

「でも、車だと目立つんじゃないか？」

雅一は、後ろに座っていたためちよつと乗り出して助手席に座っているカノンに聞くと。

「大丈夫なんじゃない？見つければAKでも撃ちまくって逃げればいいんだし」

そっけなく返事が返ってくる。

「そんなものなのかな」

「そうそう。」

どんどん北西の方に進んでいき学校が見える。

「ここが、二人が立てこもっている場所ね。」

校門の前で高機動車が止まる。

「それじゃあ、シマリはここで待機。私たち二人で様子を見に行きましょう」

「わかった」

「はい」

返事をしたと同時に銃撃戦が聞こえる。

「毎回こんな感じだよな」

雅一がうなだれながら言う

「あなたって疫病神なんじゃない？だって、間違ってロゲインしてきてこんなことに巻き込まれたんだから」

ロゲインを間違えてきているのを知っているのはカノンだけなのでシマリは首をかしげる。

「疫病神って失礼な！」

雅一は抗議するのだが無視されて

「さあ、行くわよ。」

そうして、カノンは、AK 47を二丁持ち。

雅一は剣とグラッチをホルダーにしまって進んだ。

『バン、ドン、ドトドバババ』

銃撃の音がだんだんと近くなってくる。

カノンが俺を手で押さえる。

「この先みたい。」

雅一は、そつと覗くと教室をはさんで銃撃戦をしていた。
女の人が一人で銃撃している。

それに、三人の軍服の男が応戦していた。

「やばいんじゃない!？」

雅一は心配そうに言うのだが

「大丈夫よ。絶対勝てるわ」

女の人がM4を窓越しに撃って応戦するのを、AK 47を持った
軍服の男が応戦している。

徐々にコンクリートが削られていき穴が開いている個所も多数み
られる。

それでも、M4をぶつ放しては隠れと威嚇しながら撃っている。

「本当に大丈夫？」

雅一がこの劣勢な状況で心配している。

「もうそろそろ終わるかな。」

カノンがそう言うとき突然一人が倒れる。

そして、紫色の髪のツインテールの女の子が突然出てきて、ナイフ
でもう一人を切る。

そして、その間に教室に立てこもっていた女の人飛び出てM4をぶっ放し最後の一人も倒れる。

戦いが終わるとカノンが普通に歩いていき

「さすが！キリにアヤネもやるね」

そう軽い感じの口調で言いだす。

「まあ、こんな所ね」

そう言ったのが先ほどまで教室に立てこもっていた女の人で黒色で髪が長くとてもきれいな人だった。

「当然」

簡単に一言で終わらせたのが身長が150？前半ぐらいの紫色の髪の毛のツインテールの子だ。

そして、雅一が出ていくと、M4と拳銃を二人同時に向けられる。

「誰？」

「……」

雅一は、なれたように手を挙げて

「撃たないでくれよ。」

「大丈夫よ二人ともこの人新しく仲間になった人だから。」

そして、カノンがフォローする。
そういわれると二人とも銃を下ろす。

「俺の名前はミノマサだ。よろしく!」

そう言つと黒髪の人が、

「私のは、アヤネ。まったくカノンはいい男を見つけたじゃない」

「いやいや、違つて」

そんな風に会話が繰り広げられると

「…キリ」

紫色の髪のツインテールの子が簡単に自己紹介を終える。

「アヤネにキリもよろしくな!」

「最後に、シモハルとカオルとの合流だけど結構距離があるから明日にしましょ。シマリを車ごとこっちに呼んでここで一泊ね。」

カノンがMCDを見ながら言い

すぐさまシマリに連絡するとももの数十分でこちらに来る。

そして、アヤネとキリとの再会に喜びつつサバイバルゲーム二日目
が過ぎていく。

そして、夜の見張りを3時間おきの交代にすることになる。

雅一はぼつと星空を見る。

「これって全部ヴァーチャルだもんな」

雅一は、今までゲームを詳しく見たことがなかったので改めて感慨にふけていた。

「しかし、今日はいろいろなことがあったよな」

一日でいろいろなことが起きた。

サバイバルゲームの開始やカノンたちと仲間になったりといろいろなことがあった。

そして、雅一はこの先も不運がないようにと切に願った。

6 二人が逃げる 雅一が飛び出す

一夜明け、また移動を開始する。

5人と大所帯になりつつあるが高機動車は、定員10人なのでまだ余裕がある筈なのだが。

後ろには銃などの弾薬が置いてあり意外にスペースがないのも現状だ。

キリは、黙って座っており。

アヤネは足を組みながらリラックスしている様子であった。

雅一もそれなりにリラックスしている様子だった。

敵に遭遇することなく進んでいった。

時速40キロと遅めなのだが歩いていくよりは大分違うなと雅一は実感した。

ゆったりとドライブ気分でくつろいでいたのだが一発の手榴弾によって変わってしまう。

『ドカッ。バンバンドド、バン、ドカン』

急に戦闘が始まったのだろうか突然轟音が鳴り響く。
しかし、周りで起きたわけではなく。

この近辺で戦闘が開始したようだ。

「ストップ」

カノンの声と共に車を一旦停止させる。

「キリ状況確認よろしく」

カノンに言われてキリは、

「了解…」

簡単に装備などを点検してキリは出ていく。

「俺もいく」

そっいつて雅一も付いて行こうとしたのだが

「あなたは邪魔なだけ…」

そう言って断るのだが雅一は無理やり付いて行こうとする。

「カノンいいよな？」

雅一はクランリーダーであるカノンに訊ねる。

「いいわよ。キリと一緒に行ってきても」

「カノン…」

キリが目で訴えるがすぐに諦めて

「付いて来て」

一言だけ言われた。

「わかった」

そして、キリと共に瓦礫の下を通って行き少し広い道路に出た。

「ストップ」

キリに止められて雅一が目の前に広がった光景は、20〜30人の軍服のNPCと装甲兵員輸送車二両から必死に逃げている二人の女の姿だった。

二人とも建物にそって銃撃しつつ逃げているがどう見て不利なのは確かだ。

装甲車両からの機銃掃射も相まって余計不利な状況だ。

「おい、どうするんだよ!？」

そんな心配はよそにキリは、冷静に戦場を見ていた。

「敵は、26人に、装甲兵員輸送車二両はたぶんソ連のBTRだから。追われているのは解放軍。」

「解放軍って味方じゃないかよ!どうするんだ!？」

「二人だけで対処は無理。カノンたちを呼ぶ…」

そう言つて片耳だけでつけるヘッドセットを装着して連絡を取る。
MCDとワイヤレスでつながっており通信の際には便利なものになっている。

そんな中状況は刻一刻と変わっている。

二人は頑張つて逃げてはいるが追いつかれそうで、ついに3階建ての建物に立てこもった。

一階部分で必死に応戦はしているが数が数なので反撃の隙がわずかなかった。

徐々にせまる敵に何もできずにいたのを見て雅一は手にこぶしを作り握る。

「キリまだか!？」

雅一は、キリに催促するが、

「まだ」

しっかりと冷静な目で戦場を見ている。

そんなキリに愛想つかした雅一は自ら行動することにした。
あと一歩で中に入られそうなところで雅一は動いた。

「ちょっと」

キリの叫びも無視し。

「ほらこつちだ!！」

大声で誘導しながら

「炎の魔法、ファイヤー」

レベルが低くても使える魔法なのだがFPSは魔法がないためかなり有効だ。

それによつて炎の壁ができ。
数人は巻き込まれる。

こちらを見て敵も発砲する。

『ドドド、ドドド、ドドド』

ぎりぎりビルの中に飛び込む事が出来た。

「大丈夫か？」

真っ先に二人の無事を確認した。

「うん」

そう返事したのは、茶髪のサイドポニーの女の子だった。

「ありがとうございますわ」

丁寧な物腰で言ったのが金髪のロングのFPSには似合わないお嬢様のような女の人だった。

「助けてくれたのはありがたいけど、これからどうするの？」

茶髪のサイドポニーの子が聞いてきたため。

「任せとけ！」

雅一は剣を持って戦場へと飛び込んだ。

7 剣が折れる 集合と急襲

雅一は、まず三人に狙いをつける。

「スキル神風&疾風」

神風は五倍速くなるスキルで疾風と合わせるにより八倍に上がる。

ただしこの合わせスキルを使うと一日スキルと使うことができなくなる。

八倍の速さに達すると敵の動きがスローモーションに見える。

そして、銃から吐き出される銃弾も野球ボールが飛んでくるときの感じみたいな速度に見えてくるのだ。

雅一は銃弾をよけつつ、銃弾を一つ切りそのまま一人の男を首ごと切断する。

そして、もう一人の男には、片手でグラッチを抜き三発撃つと一発が顔に当たりそのまま倒れる。

もう一人が銃弾を至近距離から撃つがしゃがんで避け二つ銃弾を切りながらそのまま首ごと切る。

なぜ雅一は首や顔を狙うかと言うと胴体などには、防弾もしくは防刃チョッキなどを装備しておりダメージが少ないと考えたからだ。

しかし、首を切るときの感覚はとても嫌なものだと雅一は感じる。

残りも数人ちよいに減ってきたところで後ろからサイドポニーの子がUMPでリズムよく撃っている。

UMPとは、サブマシンガンで軽さと凡庸性に優れた銃だ。

それをリズムよく撃つことによって二人に当たり他も一時的に動けない状況が出来た。

たとえ一瞬であつても雅一にとっては長い時間でその際一人に近づきグラッチを撃ち一人を倒すと隣にいた兵にもグラッチをおみする。

そして、五メートルぐらい離れた兵から放たれた銃弾を一気に五発分を切る。

そして一人を突き刺し、残り四人と装甲兵員輸送車二両が残る。

そして、装甲兵員輸送車から銃弾の嵐が降ってくる。

それを回避しきれない分を剣で銃弾を切っていたら。

『ピキ、ピキピキ。パリン』

使っていた剣の剣先が見事に真つ二つになってしまった。

「えっ！」

雅一は頑張つて素材とお金を集めて作った剣にものすごい愛着があ

ったのだが壊れてしまつてショックを受ける。

しかし、戦場は無常なものでショックを受ける暇もなく銃弾の嵐が降り続く。

さすがに何発かは、かすりはしたが致命傷を負つてはいなかった。

「まずいな……」

雅一がピンチな時に。

突然装甲兵員輸送車の射撃手に銃弾が降り注ぐ。

一人は頭に直撃し倒れてもう一人は後ろから忍び寄ったキリによって切られる。

「おお!!」

雅一は、カノンたちの姿を確認する。

残り四人もカノンとシマリが放った銃弾により沈黙する。

そして、アヤネが装甲兵員輸送車の運転席に座っているNPCを引きずり出しナイフでバツサリ切ると戦いが終了した。

「サンキューなみんな!」

雅一は命を救われたのに感謝をする。

「まったく、とんだ荷物を見つけたかも」

カノンが毒づき。

「あれだけの人数でよく飛びこむような無茶をしますね。あなたはバカなんですか？バカ！？」

シマリが怒っているのだがどこか心配そうな感じで言う。

「まったく、そういう子。意外に好みよ」

アカネが雅一に近づく。

「それより、二人とも大丈夫！？」

近づいてくるアカネを無視する。

雅一の胸がドキドキしたのは男なので仕方のないことだ。

二人は建物から出てきた。

「ありがとう」

「ありがとうございますわ」

二人ともお礼を言う。

「二人とも名前は？」

茶髪のサイドポニーの女の子がまず最初に言う。

「私はシノミ。フリーの傭兵。そして、こっちの子が……」

シノミが紹介しようとしたときに金髪のロングのFPSには似合わないお嬢様のような女の人が口をはさむ。

「私の名前は、確か……ヒ・メでよかったでしたわよね？美夏ちゃん！？」

「わぁーわぁー、本名言っちゃダメ！！」

慌ててシノミがヒメの口をふさぐが時すでに遅く全員に聞かれる。

カノンがふざけて

「よろしくね！美・夏・ちゃん！！」

そう言うとシノミが顔を真っ赤にした。

8 新たなる増員 車両交換

「初めて聞きましたよこのGCTで本名なんて」

シマリが更なる傷口を広げようとする。

「ちょっと、ちょっと」

シノミが慌てているが

「あらあら～大変なことになってしまいましたわ」

ヒメは笑いながら状況を面白がっているかのように見える。

「ちょっと、ヒメにあればど本名をいっちゃだめって言ったのにさつそく破るなんてー！」

「まあまあ落ち着いて。美・夏・ちゃん」

雅一が言ったら。

『カチャ』

シノミがUMPの銃口を雅一の方に向ける。

「次にしゃべったら頭が吹っ飛ぶわよ。」

すぐに雅一は手を挙げて

「撃つな！はやまるな！話せばわかる！！」

「しゃべるなって言うのが聞こえなかったのかなー??」

シノミは、UMPのセーフティを解除する。

「二人とも落ち着いて」

カノンがUMPを手で持ち上にあげる。

最初の原因はお前だろうと雅一は心の中でつぶやく。

「そうですわ！……えっと、シノミちゃん！人にむやみに銃を向けては、いけませんわ」

ヒメも二人の喧嘩の仲介をする。

元々の原因は誰かな？そんなことを二人して考えていたことは二人とも知らず。

「それで、あなたたちは、フリーの傭兵ってことでいいのね？」

カノンが一番最初に聞いた。

「そう、でもヒメは今日が初めてなの。私が誘ったせいで」

シノミが顔を下に向ける。

「シノミちゃんそんなこと気にしてませんわ。」

ヒメは、暖かい笑顔で言う。

「でも……」

「それじゃあ、ヒメの事情を教えてくださいませんか？できる限りで」

雅一は、なるべく話をそらそうとした。

それにヒメは乗ったのか話し始める。

「私は、ずっとお家にいましたの。外出する時も周りに人がいるのが普通でしたわ。でもシノミちゃんは、そんな私を見て遊びに誘ってくれましたの。それで今日は、シノミちゃんがいつもやっている……えーとV……R……MM……O……F……PSというのを一緒にやりましようと言って誘ってくれましたわ。それが事情ですの。」

「なるほど、それでこのサバイバルゲームに巻き込まれたわけだ。」

雅一は、ヒメとシノミの話を聞いて納得する。

さらに、ヒメがお嬢様だと推測できる。

カノンが顎に手を置きながら

「それじゃあ、私たちのクランに入らない？これから先、二人だけじゃあ大変そうだし、旅は道連れって言うでしょ。」

「それは、嬉しいですけど」

シノミは、難しい顔をして考えているが

「シノミちゃん。いいじゃありませんか。この人達となら大丈夫だとわたくしは思いますわ。」

ヒメがシノミに目をつるつるさせながら言う。

「ヒメがそういうなら。カノンさん私たちクランにはいますよ。」

うるつるに負けたシノミが頷く。

「さすが、美夏ちゃんですわ!」

「だから、本名言っちゃだめだつて!」

「ゴホッソ。それじゃあ、“月下の灯”にようこそ。シノミ、ヒメ! M C D 貸してくれるかな?」

「はい」

シノミはすぐにM C Dを渡すのだが、

「えむしでいゝ???」

ヒメは頭の上にはてなマークがたくさんついているようだった。

「これがM C D。結構重要なんだから大事にしないとだめよ」

シノミがヒメにM C Dの説明する。
そして、カノンに渡す。

「これよしつと、二人ともこれからクランメンバーよ。よろしくね。」

新たに、二人仲間になった。

「私は、アヤネ。よろしく」

「シマリって言います。」

「…キリ」

三人とも自己紹介を終える。

「さて、この装甲兵員輸送車どうします?」

シマリが無傷のまま残っている装甲兵員輸送車を指さす。

「そうね。それなら二両とももらっていいとか。高機動車から武器弾薬を下ろして」

カノンが提案するのだが

雅一が疑問に思ったことを口にする。

「でも、一台はシマリが運転するとしてもう一人は誰が運転するんだよ?」

「私よ」

「カノンが!??」

雅一はカノンが運転技術を持っているなんて信じられなかった。

「何でそんなに驚くのかなー私は、車両程度なら運転できる技術を

「持っていますー」

アヤネが

「二人とも痴話喧嘩せず。武器弾薬の移し替えやるわよ」

「痴話喧嘩じゃない!!」×2

「息ぴったりじゃない」

「そうですわね」

カノンと雅一が息ぴったりな発言をしたあと
高機動者から装甲兵員輸送車に武器弾薬を移し替えて
二人の回収に向かった。

9 車両の説明 銃剣と銃撃音

「そういえば、この装甲車の名前なんだ？」

雅一は、でこぼこなコンクリートの道路の上をゆつくりと走っている装甲兵員輸送車に激しく揺られながらカノンに訊ねる。

「何だっけ？ キリ」

「BTR D」

「そうそう、BTR Dだ。たしか……」

雅一はいやな予感をしたが一步遅く。

「ソ連の装甲兵員輸送車で空中での輸送できて、空中投下も可能だったはず。兵員室には完全武装の空挺兵十人を搭乗させて輸送できて。兵員の乗降は、天井の二か所のハッチと後部の大ハッチがあつてそこから人の出入りができる。そして車体には二か所の銃眼があつて。消火装置とNBC防護システムも設備されている万能な装甲車なの。そして、NBC防護システムっていうのは、Nが核兵器を意味するNuclearでBが生物兵器を意味するbiological。最後にCが化学兵器を意味するchemical。その頭文字をとってNBC。それらに対応できる設備が備わっているってことね。」

またもや、先ほどの銃撃戦より激しい口撃の嵐に雅一は、ちょっと引き気味になる。

キリは、何もなかったかのようにして座っている。

「キリお前は大丈夫なのか？」

「…慣れた……」

そのキリの言葉がすごく印象に残った雅一だった。

「あと二人って何て名前なんだ？」

雅一は、揺られるなか頭をぶつけないようにしてカノンに聞く。

「あと二人は、カエデとシモハルよ。二人とも狙撃が得意なの」

前を見つつ雅一と話すという器用なことをしながら言う。

「ここのクランって結構バランスいいよな。狙撃が出来る奴や、近接戦闘が出来る奴、運転ができる奴もいるんだから。」

「そうね。集めたら勝手にそうなったのが正しんだけどね。」

車内は、エンジンと音と車輪が石を巻き込む音のみが聞こえてくるようになった。

前を走っていた装甲車から無線がかかる。

「こちら、シマリ。こちら、シマリ。聞こえますか？」

カノンが、無線のスイッチをオンにする。

「聞こえます。どうしたの、シマリ？」

「もう少しで合流地点に到着するのですがここら辺で降りて徒歩で行きましょう。」

シマリの提案に少し悩んだ後

「了解。その瓦礫の下に入れれると思うから、そこから徒歩で動ね。」

「シマリ、了解。」

無線の切れる音がする。

「二人とも聞こえたわね。」

「…うん」

「聞こえたぞ。」

そして、がれきの下に装甲兵員輸送車を二両入れる。

「二人とも出ても大丈夫よ。」

後ろにある扉から二人は出る。

「疲れましたわ。」

「ヒメ、大丈夫か？」

「肩が凝りそうね。」

もう一つの装甲兵員輸送車に乗っている3人とも出てきて背伸びをしている。

7人が集まりカノンが口を開く。

「シマリとシノミとヒメはここで待機して。4人で合流地点に向かうわよ。」

「ありがとう。カノンさん」

シノミがカノンに頭を下げる。

「もう、仲間なんだからカノンでいいわよ。」

「わかった。」

「他のみんなもいい??」

「了解」×6

各自武器弾薬を再確認して合流地点へと向かう。

「ここから、どれぐらいかかるんだ?」

「そうね…30〜40分ぐらいじゃない。」

剣が折れてしまったために変わりの銃としてM4を持っている雅一がAK 47を二丁もっているカノンに聞いた。

後ろからは、RPKを持っているアヤネとM4を持っているキリが

後ろから付いて来ている。

ちなみにキリのM4にはなぜ銃剣が装備されている。雅一のは、
アUNDERグレネードが装備されている。

「キリ、何で銃剣なんか装備してるんだ？」

雅一が後ろに向き疑問に思ったことを聞く。

「……弾薬がないから……」

「弾薬がない？」

キリの言葉にはてなマークを浮かべる雅一だった。

「キリは、銃剣が弾薬も関係なしに使えるからいいって言う事よ。」

カノンが代わりにこたえる。

「なるほどな」

雅一は、きらりと光る銃剣を一目見て前を向き直り進む。

数十分歩いていると。

バーン ドドド ダダダ ドン ドン

銃声音が鳴り響く。

「このパターンは……」

「まったく、あなたは本当に疫病神みたいね。」

「それは、言わない約束だろ!!」

四人は、走りながら銃声音が鳴り響く場所に向かう。

いつて見ると想像通り二人の少女がビルに立てこもって抵抗している風景が広がる。

「敵がおおいかしら」

アヤネが、状況把握をする。

「それなら、シマリに連絡して車を出せる準備をさせないと」

そう言つてカノンは、無線でシマリに連絡を取る。

「シマリ、緊急事態よ。あと3、40分したらそっちに向かうから、車をいつでも出せるようにエンジンを温めておいて。」

「わ、わかりました。」

シマリが慌てた様子で無線を切る。

カノンがみんなの顔を見渡す。

「ミノマサだっけ？名前。あなたのスキルでこの状況をどうにかできないの？」

「無理だな。さっきの時点でスキルを使い切って一日たたないと回復しないし、なんせ剣まで折れちまったからな。」

「使えない疫病神ね。」

「ほっとけ」

カノンが銃撃の音を聞きながらその様子を見て

「それなら、私と疫病神が二人の所に行くから、二人はここで待機して。」

「俺の名前は疫病神かよ……」

「わかった」

「…了解」

「へいへい、わかりました。」

二人はビルへと向かうために飛び出した

10 狙撃と下手 撤退戦序幕

ドドド ダダダ

敵のAK 47から吐き出される7・62x39mm弾がコンクリートに当たって穴をあけていく。

二人は、屈みながら少しずつ、がれきなどを盾に進んでいく。

「ストップ。ちょっと待ってね。」

ベルトから手榴弾を取り出してピンととり、投げ捨てる。

ドーン

爆風が起き破片が舞い散る。

「今よ！」

カノンの合図と共に屈むのをやめて一気にビルまで向かう。

カノンは窓から飛び込み。

雅一は、ドアからスライディングみたいな感じで中に入っていく。

「二人とも大丈夫！？」

「カノン！」

「やっと来てくれたー」

二人とも160?前後で一人が茶髪のショートの子で、もう一人が青色の髪で、後ろでお団子みたいな感じにまとめている女の子だ。その二人は、雅一に片手でもっている拳銃の銃口を向けている。

「はは…なんか俺のキャラって…」

おとなしく手を挙げてM4を地面に置く。

「二人ともその人は新しく入った人よ。」

「そうだ。ミノマサだよろしく。」

「そうなんですかー。私は、カエデといいまーす。」

茶髪のショートの子が拳銃をホルダーにしまう。

「私の名前は、シモハル。よろしく!」

青色の髪で、後ろでお団子みたいな感じにまとめている女の子も拳銃をホルダーにしまった。

「それで二人ともここから30分したところに車を待たせているからそこまで撤退戦よ。」

「いきなり、大変だな」

「もう、最後はおいしいものでも食べたいよー。」

二人とも絶望的な顔もせずに逆に明るい。

カエデは、M21を持っている。

シモハルは、M24を持っている。

M21はアメリカの軍隊が採用しているセミオートの速射ができる狙撃銃だ。

M24は、ボルトアクションの速射はできないが一発のダメージが大きい銃だ。

「ミノマサ！私たちがその扉から出ていくから」

カノンが銃声音でかき消されないように大きな声でいい扉の方を指さす。

「わかった！」

雅一も負けずと大きな声で了承する。

雅一が窓から顔をだしM4をぶつ放す。
撃つのだがすぐに銃撃が集中してすぐに隠れる。

「もうちょっと頑張つてよ！」

カノンたちが出るタイミングを見失う。

「ここは、私に任せなさい。」

カエデがM21を構える。

「それなら、カエデとミノマサ。援護よろしく。」

「ミノマサ君行くわよ!」

「了解!」

言葉と同時にカエデが窓から顔をだしM21を撃つ。

雅一も同時に顔をだしM4を撃つ。

「すげー」

雅一は、カエデの射撃の腕に感心していた。

一発一発が雑なのだが敵に吸い込まれるようにして当たる。それに比べて雅一はかすりもしない。

「あたらねー」

雅一が窓の下に隠れて弾倉を交換する。

二人が援護しているすきにカノンとシモハルは飛び出してアヤネとキリの居る場所に何とかたどりつく。

「シモハル久しぶり」

「アヤネさんも久しぶりですね。」

「感動の再開はこころへんにして二人をどうにかしないと」

十数人の敵に囲まれて二人は動けないでいる。
徐々に押されている。

ダダダ パスパス

コンクリ トと銃弾が当たる音や貫通する音が聞こえる。

「この状況やばくないか…」

雅一が二回目の弾倉を交換している。

「弱音を吐かない！」

隣で力エデもM21の弾倉を交換している。

「あと弾どれくらい？」

「えーと」

雅一がベルトやポケットを探って

「あと、5つある。」

「そうですか……それならアングレでかく乱して合流しましょう。」

アングレと言うのは、アンダーグレネードの略称だ。

「わかった」

雅一がM4を構える。

「合図しますから5・4・3・2・1・今です!」

「おら、もてつけ!」

M4のM203 グレネードランチャーから40mmグレネードが撃ち出される。

ドカーン

激しい爆風と共に二人は動き出し瓦礫の下に来る。
それだけでは、敵の勢いは衰えずすぐに銃撃を再開する。

「これ以上いけん。」

雅一は、M4で敵を狙うのではなくただ威嚇するためだけに撃つ。

「ちょっとまずいですね。」

瓦礫のコンクリートがはがれていつている。

「ピンチだな。」

「そうかも……」

二人は、がれきの下で抵抗できずにいた。

11 撤退と倒壊 撤退戦前編

「どうするんだ!？」

雅一は、M4の弾倉を変える。

「動けないからどうしよう?」

カエデは息を整えている。

「カノンたちは何をしてるんだ。」

雅一が言つと同時に爆発音が聞こえて

「早く来てーーーー!!」

カノンの大声が聞こえる。

「カエデ走るぞ!」

「りょうかい!」

二人は走って行きカノンたちと合流する。

「今から少しずつ撤退していくわよ。付いて来て」

後ろからみんながついていく。

しかし、敵部隊もこちらに来て銃弾の嵐を浴びせる。

六人は瓦礫の下に隠れて銃弾を防ぐ。

「それじゃあ、交代交代で下がって行くから。肩で触れたら後ろに下がる方法で行くわよ！」

ここから見るだけで敵は3、40人入る。

「反撃開始」

カノンの言葉と共に銃弾をぶっ放す。

「おらおらー！」

「散れー！」

「……」

そして、カノンがアヤネの肩をたたきカノンが後ろに下がる。

「まだまだ」

雅一はM4を確実に当てるように撃っているが当たらない。

その隣でシモハルとカエデが狙撃で確実に当てている。

「はい、次」

アヤネがキリの肩をたたき後ろに下がりRPKの弾倉を変える。

「…どうぞ」

キリがシモハルの肩を叩く。

その間にも銃撃はやまずコンクリートが次々とちりとなって舞う。

「次、カエデ！」

シモハルがカエデの肩をたたきM24から拳銃のM9に持ち替えて後ろに下がる。

「最後です。」

カエデが雅一の肩をたたき後ろに下がる。

「もういいかな。それじゃあ、炎の魔法でももらっとけ！」

炎の壁が出来て雅一は後ろに下がる。

「ミノマサ！あれ何！？」

シモハルが炎の壁を指さす。

「詳しいことは生き延びてからね。ミノマサ！アングレの煙幕で一気に距離取るわよ。」

カノンが質問を後からにして雅一に指示をする。

「了解」

雅一がM4のアンダーグレネードから煙幕弾が撃たれ周りが白く包まれる。

「今よ！速く！速く！」

六人は走って行く。

瓦礫を利用したりしながら進んでいく。

しかし、銃弾の嵐はやまず強烈な爆音と共にビルが倒れる。

「危ない！」

カノンが雅一を押して瓦礫を逃れる。

「た…たすかった」

目の前に瓦礫の残骸を見てほっとする。

「RPGまで使ってきた。」

「RPG??」

「RPGは、ゲームのジャンルのrole-playing gameの略ではなくて、ソ連が開発した携帯できる対戦車ロケットRPG 7で威力もそこそこあるわ。その略というのがRPG。」

手榴弾の爆発音や銃撃の音が響いている。

「なるほどな」

FPS系のリアルな銃に詳しくない雅一にとっては分かりやすい説明だった。

「敵がRPGまで持つてるとなると厄介ね。何か魔法使えないのだからかな。」

「残念ながら俺は専門が剣士で魔法は必要最低限しか使えないんだ。」

雅一は、剣士で素早さを特化させてあるため魔法は付加魔法を中心としていて攻撃魔法はたくさん覚えていない。

「使えないわね。みんな！スタン投げるから走ってね。」

スタンと言うのはスタングレネードで閃光と音を出す非殺傷用の武器で目くらましには最適だ。

後ろから強力な光が放たれ音も一緒にまき散らす。

後ろを振り向かずにとただ前だけを向いて走っている。

カノン達がようやく装甲兵員輸送車が見えてくる。

「見えた！」

カノンが叫んだのと同時にRPG 7の弾頭が飛んできてそれがビルに当たり崩れ始める。

「みんな急いで！」

カノンがまた叫んで一斉に走り出すがシモハルとキリが取り残される。

カノン達との間にでかいコンクリート残骸と看板が立ちふさがる。
シモハルはボルトアクシヨンの連射に不向きな銃を使っているが、
ごい速さで撃っている。

キリもM4を丁寧に撃って近づけないようにしている。

二人はビルの中に閉じ込められている状況になっている。

唯一の窓は敵が来るため使えないでいる。

次々と敵が追ってきてAk 47をぶっ放している。

倒しても倒しても出てくる。

「キリどうしよう！切りがない！」

シモハルが叫ぶ。

「キリがいて切りがないか、ダジャレうまいな」

雅一が明るい声で叫ぶ。

「いったい何考えてるのよ!？」

カノンが怒り出してそわそわと焦りだしている。

「任せる。ロープだけ貸してくれ。さてとRPGで培ってきた技術
を見せますか」

雅一が準備運動をして体をほぐしたりしている。

「はい、ロープ。」

カノンが装甲兵員輸送車からロープを持ってきて渡す。

「カノンたちは、車に戻っていつでも出せるようにしておけ。」

「本当に大丈夫??」

心配そうな顔を見せる。

「大丈夫だ。」

「わかったわ。あなたを信じてみる。」

「ああまかせておけ」

カノンたちは装甲兵員輸送車へと戻って行った。

「さてと行きますか。」

雅一は目の前に立ちふさがるビルを眺めて動き出した。

1 1 撤退と倒壊 撤退戦前編（後書き）

誤字脱字、感想、評価待ってます。

12 付加魔法と脱出 撤退戦後編

雅一はビルを観察する。

一階部分はコンクリートのみだが3階部分辺りに人が三人通れる穴が開いていた。

「あそこだな」

雅一は魔法を使う。

「付加魔法を多重でかけて」

いろいろな魔法が頭の中をかけて様々な付加魔法を選び出す。

「これと、これとこれだな」

3つ付加魔法を選択して三重魔法を使う。

魔法は、体が軽くなる。ジャンプ力を上げる。足の下の負荷を軽減する。の三つだ。

雅一はもともと攻撃魔法は苦手だったのだが付加魔法はいろいろと覚えている。

今回はこの三つを使うことにした。

「さて、待ってるよ!」

魔法の能力からわかるように一気に三階部分まで飛び着地する。

その間銃撃音は鳴り響いている。

「どうする？」

「……」

二人は何とか耐えているだけで次にRPG 7の弾でも飛んできたものならば一瞬で粉々だ。

ドーーーーーン

突然上から轟音が鳴り響き、上の一部分が崩れる。

「何！？」

「…敵」

二人は慌てて銃を構えて砂埃が舞うのが終わるのを待っていると。

「ゴホッ。ゴホッ。手榴弾の威力強すぎだろ！」

突然雅一が降ってきたのだ。

雅一は三階部分から降りるところを探したのだが見つからず。

「ないなら作ればいいか」

シモハルとキリがいなさそうな場所を探して手榴弾を置いて走って離れようとするが手榴弾が爆発するのが早く。

ドーーーーン

そのまま落ちて行った。

咄嗟に雅一は付加魔法を二つ掛けた。

一つは肉体強化。全身耐衝撃。

そして床に激突したがたいしたダメージにもならず周りは埃が待っているが立ち上がり。

「ゴホッ。ゴホッ。手榴弾の威力強すぎだろ！」

そういうと銃が向けられる音が聞こえて。

「ミノマサ!？」

二人の姿が見えた。

「二人とも無事か!？」

「…うん」

「もちろんです。」

敵の銃撃は砂埃により少しの間、静かな時間が続く。

「二人とも逃げるぞ！」

「どうやって？」

二人を雅一が両腕に抱える。

「ちょっと!!」

「……………」

付加魔法がかかっているために、軽々しく持ち上げる事が出来る。

そのまま三階部分まで上がってくると雅一の耳に大ダメージを与えるぐらいの大きなこれで

「あんた何者!？」

シモハルが叫んだ。

「うるさい！耳元で叫ぶな！…あと俺は正義の魔法使いだ！」

「正義の魔法使いね。へえ」

ちよつと冷めた言葉に聞こえた。

「な、なんだよ」

「いや何にも……」

その後シモハルが笑ったような気がした雅一だった。

「三階からどうするの？」

「そりゃ、こっからダイビングだ！」

「えええー！ー！ー！」

「行くぞ」

「待つて待つて」

シモハルが足をバタバタし始める。キリは黙ったままだった。後ろから爆発音が一気に聞こえて建物が崩れる音がした。

「さて、時間がないからいくぞ！ー！」

「きゃあああー！ー！ー！ー！」

「…っ！」

三人は三階から飛びビルは爆発により崩れて行った。そして、雅一は二人を抱えたまま地面に着地して離す。

「こんな思い二度とごめん。」

「二人とも走るぞ!」

目視できる場所に装甲兵員輸送車二台止めてあり一台が後ろの扉が
あいていた。

三人は走りだすと後ろから敵兵が迫ってきた。

A K 47が放たれながら前進してきてR P G 7なども撃つてく
る。

「おーい、三人とも早く!」

シノミが後ろの扉が開いていない方の装甲車の上のハッチから顔を出
して手を振る。

「わかった!」

シノミは軽機関銃のR P Kを出してきて援護射撃をする。

「あと少し」

後ろの扉まで10mをきる。

後ろの敵も迫ってくる。

「三人とも早く!」

アヤネが後ろの扉にいるその手にはA K 47を構えている。

「一人目!」

最初にキリが乗り込む。

「二人目！」

次に雅一が乗り込み

「はい、最後！」

最後にシモハルが乗るとほぼ同時に二両の装甲車が動き出す。

RPG 7を持った敵を発見するとシモハルがM24を構えて引き金を引く

バーーーーーン

たった一発で敵は倒れて上に向かってRPG 7を撃ちそれがビルに当たり倒壊して自分たちの方に来た。
そして、2、30人が巻き込まれる。

「ナイス！シモハル」

雅一がシモハルに親指をぐつと伸ばして手を出すと。

「当然！だってわたしだもん」

笑顔で言った。

二人も合流してようやくクランメンバーが全員そろって装甲車を走らせる。

「どうするんだ？」

雅一が運転しているカノンに聞くと

「これから、武器弾薬の補充をしにゲッターに向かうわ。ちょうど川崎ゲッターに近いから。」

「ゲッター？？」

雅一が聞きなれない単語を耳にしてカノンに聞き返す。

「行けばわかるわよ」

カノンはそれだけ言って運転に集中する。

クラン「月下の灯」は、一路川崎ゲッターに向かった。

0 / 1 地下

夕日が見える中、南下していき装甲兵員輸送車：BTR Dが途中で止まった。

「よし、ここら辺でいいかな？」

カノンが運転席から出ていくとシマリも運転席から出て行き何やら話をする。

「ここらへんに隠しておけばいいよね」

「そうですね。一番いいと思いますよ」

シマリは納得した顔になり運転席へと戻って行く。
カノンも同じように運転席へと戻って行く。

「カノン？どうするんだ？」

「これから車を置いて、ゲッターまで歩いていくの」

「ゲッターってどこにあるんだ？」

雅一が周りの風景を見てきたのだが人が住んでいるような気配は一つもなかった。

「行けばわかるわよ」

さつきからカノンはこの言葉で事実を濁す。

「ここに入れて」

装甲兵員輸送車をがれきの下に入れる。

「みんな降りて隠ぺい工作するわよ」

全員が下りてきて二両の装甲兵員輸送車を隠す。

「これでいいかな」

瓦礫の色と同化していて見分けがつかないぐらい完璧なものになっていた。

それをたったの三十分でやってのけたのだからさらに凄い。

「ここから徒歩で行くわよ」

「了解」

「はい」

「わかった」

「わかったよ」

「わかりましたわ」

「了解です」

「はいはい」

「……うん」

七人が歩き始める。

もちろん武器を携帯しながらの徒歩だ。
しかしその武器に問題があったのだが

「何でハンドガンしか持っていないんだ？もしもの時に大変だろう」

「それは、今から行けばわかるわよ。アサルトライフルとか持っていいたら大変なことになるから」

カノンが雅一の質問に答える。

アサルトライフルと言うのは、連射が出来て、中近距離向けの銃のことを言う。

「さっきからはぐらかしてばかりだな」

「行けばわかると思います」

その愚痴にシマリが答える。

「そうかね」

雅一はホルダーの中に入っているMP 433・グランチを触りながら進んでいった。

少し進むと住宅街からビルなどが乱立する都市部へと景色が変貌していつている。

「ここが川崎か。でも、人が住んでいる気配はないんだけど」

「みんなストップ」

カノンがみんなを止めて周りの様子を注意深く観察する。

「付いて来て」

動き始めるとみんなはそれについていく。

そして、川崎駅廃墟らしきものの中に入って行くのだが、そこで不自然な出入り口があった。

「大丈夫みたいね。走るわよ」

カノン以下クランメンバーが走ってついていくなか、雅一とヒメのみが状況を分かっていなかった。

不自然な出入り口の中に入って行くと、地下に続く道が出てくる。

「中に入って」

駆け足で全員、中へと入って行った。

地下へと続く道をどんどん進んでいくと人が三人ぐらい通れる扉が見てくる。

そして、突然目のあたりにある小さな扉があいて

「MCDを出せ」

とても深みのある言葉を発する。

「わかったわ。みんな、MCD貸して」

「ああわかった」

雅一はMCDを渡す。

全員分を扉についていて青く光っている所に、それぞれふれていく。

「全員OKだ。ようこそ川崎ゲッターへ」

扉が徐々に開いて行った。

扉をよく見てみると暑さが1メートルあまりあり、コンクリートでできていたためにすごい丈夫な造りとなっている。

「すげー」

雅一の目の前に広がったのは、一本の幅が20メートルあたりある所に人が所狭しと座っていたり通りがかったりしていたりしていた。

「こんなに人がいるのかよ……」

「違うわ。たぶん9割はNPCよ」

「あれがNPCなのかよ」

見てみると普通に動いている。

「ああなるほど。話さないんだ」

「正解。武器屋とかアイテム関連を撃ってるお店以外しゃべらないの。まずは休憩所を探さない」と

進んでいく。

周りには人がいてよけて通らないとうまく進めないくらいだ。

「あつた。あつた」

休憩所と書かれているところがあつた。

入って行くと、普通のホテルのロビーと同じだった。
タイル張りの床に観葉植物などが飾られていた。

「ずいぶん豪華な休憩所だな……」

雅一はポカンとした感じで周りを眺めている。

「みんな行くわよ」

ロビーに行っていたカノンが戻ってきて手にはカードを持っている。

「さあ、いくわよ」

壁の方に行きカードで触れると突然扉が出来る。

「すごいな」

「所詮、バーチャルだから何でもありませんよ」

そういつてカノンは中に入っていた。

みんなもそれに続いてく。

「なんじゃこりゃ!」

中に入った光景は畳張りで人が2、30人ぐらいは入れる大広間的なところだった。

ご丁寧に端っこに布団と座布団が人数分置いてある。

「ここは？」

「こんだけの人数をいれて安いといったらここしかなかったの。」

「金取るのか？」

「もちろん、お金は銃などを売ったり。任務をクリアするともらえる仕組みになってるの。」

「なるほどな……」

それぞれ座布団を持ってきて輪になるようにして固まる。みんな荷物らしきものは何一つ持ってきていない。

「ここでみんなにいい知らせと、悪い知らせがあるけどどっち聞きたい？」

「そりゃあ、いい知らせからだろ」

雅一が即答するとみんなも頷く。

「いい知らせは、神様はどうもやさしいらしく。シャワーとお風呂のシステムが加わってるわよ。あと食事できるよう、設定されている。」

「やった」

「嬉しい」

などと騒がしくなるところで雅一はカノンに聞く。

「そういえば、何でシャワーや食事が必要なんだ？」

「それは、人間が習慣としているところでの行動がないと、意外にだめなの。だからVRMMOは、必ず5時間で落ちるようになって

るでしょ」

「確かにそうだな」

VRMMOは、長時間プレイによる、現実世界の体の変調をきたさないために5時間と決めている。

5時間過ぎると強制退場させられるのだ。

だから、いつもやるときは時間に気を付けていたのだ。

「でも、食べなくてもいいよな？」

実質昨日から何も食べていないことに気付くそれは、空腹にならなかったことが一番大きかったのだ。

「そうね。GCT自体、別に食べる必要もないし、寝る必要もない。でも、人間の習慣はなかなか変える事が出来ないの。だから寝るし食べるの。でも、アイテムで体力回復系のレーションならあつたはず。」

レーションはパックの中に入っていて進軍の際や作戦中などに簡単に食べれるものだ。

「次に悪い知らせは……………」

「悪い知らせは……」

みんな静かになりカノンに耳を傾ける。

「米軍から任務が入って、次は米軍基地がある館山まで行くことになったわ」

カノンがMCDを指さしながら言った。

0 / 2 談話

「米軍から任務が入って、次は米軍基地がある館山まで行くことになったわ」

カノンがMCDを指さしながら言った。

「館山？」

「房総半島の端っこにある場所。まさか、ミノマサ知らなかったの？」

カエデが口到手を当てて笑う。

「そ、そんなことない！」

「はい、二人ともそれぐらいにして、まあ今日はこのままシャワーを浴びてご飯食べて寝ましょ。」

カノンの提案に一同賛成する。

「それなら…ミノマサさんが先に入ってくれないと」

シモハルが全員が立ち上がると口をはさむ。

「そうね…」

「確かにそうだな」

雅一もここでは空気を読む。
そして、シャワー室に向う。

「意外にリアルだな……」

くぎられていて合計10個シャワーがあった。
シャワー室の前には脱衣所がありそこで脱いでから、汗を流し終わると、10分で浴び終わる。

「ただいま」。シャワー結構良かったぞ。」

雅一が帰ってくる。

「早くない？」

「しっかり洗ってる。」

「きつたな」

女性陣から懐疑的な視線が飛んでくる。

「それはもちろん！」

「まあ……どうでもいいけど。さあ行きましょう」

「いっつー！いっつー！」

「……………うん」

「いきますわよ。美夏ちゃん」

「だから、本名言っちゃダメだって。」

「一日も入ってないのは致命的。」

「覗いちゃだめよ！」

最後にアカネがウィンクしながら部屋から出ていく。

「覗くかよ。命がいくつあっても足りないだろう。」

雅一は銃を何回も向けられて恐ろしさが骨の髄まで染み込んでみる。覗きでもしたならば、体に風穴でも空いているだろう……とブルと一瞬震える雅一だった。

「いや〜よかったね〜」

「おっさんみたいだよ。ハル」

カエデとシモハルが帰ってくる。

「お帰り〜」

「おお、しっかりと待ってたみたいだね。偉い、偉い」

シモハルが雅一の頭をなでようとしたが雅一が避ける。

「乗り悪い！」

「気にすんな！」

「お二人さん落ち着いて、ほらハルも」

カエデがシモハルをあやす。

「ハル？」

名前の下だけで読んでるのが気になった。

「ああ、ミノマサ君もハルでいいよ」

「それなら、俺もマサでいいよ。ハル」

「カエデは……カエデのまんまだね。」

「そうだね〜」

二人の息はぴったりだ。

「二人は、リア友なんか？」

リア友と言うのは、リアルの友達ようするに現実の友達の事をさす。

「そうそう。」

「私たち、学校が同じなの。」

「へえ〜そうなのか……」

「へえ、そうなんです。」

「しかも、カエデって本名と全然違うんだよ。」

「こら！ハル言っちゃダメ！」

二人がかわいらしく取っ組み合いをし始めてその後はすぐに会話に花が咲いていた。

次に、ヒメとシノミが戻ってくる。

「気持ちよかったですわ。美夏ちゃん」

「はあ〜もういいよ」

散々、本名を連呼されてシノミもどうでもいいようになっていた。

「ミノマサ。しっかりとここにいたよね」

「まったく、俺の信頼はないのかよ……。あと、俺の名前はマサでいいよ。」

二回連続、雅一を見た反応がこれだったためにもう呆れるを通り越していた。

「みなつ、だっただけ？」

「マサ、殺されたい？」

「いえ、まだ死にたくないです」

「それは、賢明ね」

「美夏ちゃん。落ち着いてくださいわ」

「はぁーーーー」

シノミは深いため息をつく。

「お疲れ！」

雅一がシノミの肩に手をバンバンと叩く。

シノミは項垂れてそれをかまっているヒメの構図が出来上がった。

「おいおい、どっちが保護者だよ……」

アヤネとキリが部屋の中に来る。

「あら、ミノマサくん。シャワー覗きに来なかったのね。せっかく待ってたのに〜」

アヤネが濡れた髪を強調させる。

「水の滴るいい女じゃない？」

「はい、もちろん」

雅一が即答するとアヤネがちょっとビクッとなる。

「まあ、いいこと言うわね。」

「……………」

キリはさつきから黙っている。

「あと、アヤネさん。俺の事はマサでいいですから、キリも」

「わかったわ。マサ」

「…………マサ…………」

「さあ、食事よ!」

カノンとシマリの手には、ポットと

「何で?カップ麺?」

大量のカップ麺を持っていた。

「だってー、便利なんだもん」

「そうですよ。便利なんで」

「それならいいが……………」

……………。

……………。

……………。

水が暖まりお湯になり、カップ麺に注いでいく。

そして、7人が一斉に麺をすすりだす。

雅一から見たら、とても異様な光景に見えた。

あつという間に食べ終わる。

「おいしかったけど、よくここまで再現できてるよな」

カップ麺は、現実通りの味だったので驚く。

「確かに、リアルすぎるよね。でも、満腹になった感じがしない。ただ食べただけって感じ」

カノンに言われて雅一は気づくのだが満腹になった感覚が一切なかった。

「確かにそうだな……」

その後、雑談が始まり。どこかのお泊まり会みたいな感じになる。雅一は本当に死をかけたゲームをしているのかわからなくなる。

「話もここらへんにして寝ましょ。任務については明日ね。」

カノンがそういうと、布団を敷いて寝る準備を整える。もちろん雅一は完璧に隔離されている。

電気が切れて、真っ暗になる。

雅一は寝れずにいた。

凄く近くに女の人がいるということでドキドキしていたのだ。

雅一は今までこんなに近くで寝たことはなかったのだ。

寝れずにいたのだが、睡魔が誘ってきたときにようやく寝れたのだ。

0 3 受諾

朝は早くてみんな6時おきだった。

「そういえば…マサって何でその恰好なの？」

シノミが朝ごはんを食べている最中に突然質問し始めた。
ちなみに朝ごはんは、トースト二枚にレーションの肉みたいな奴だった。

「そついやあ、まだ話してなかったな。」

「そついえば、そうね」

カノンと雅一が納得する。

「それなら…簡単に」

雅一は最初、カノンに説明した通り同じ内容をみんなに話す。

……。

……。

……。

「」愁傷様」

「運が悪いとしかいいようがない！」

「……どんまい……」

「何だが俺の方が落ちこんで、いくんですけど……」

雅一がうなだれる。

「それは置いて、今後の事を話そう。」

「おいてくなよ!」

雅一の突っ込みをスルーして、カノンが続きを話す。

「今置かれている状況は、生き残りをかけたゲームが始まって、何とかランメンバー全員を集める事が出来た。そして、このタイミングで米軍……ようするに運営側いや、このゲームの主催者が館山まで行けと言ってる。私たちは何もする事が出来ずにいる。こんな所かしら。」

カノンが要点要点でまとめる。

「うーん、それなら、このまま流されるのもいいんじゃない」

アヤネがそういうとみんなが驚いた顔になる。

「へえ……一番いやだと思ってたのに」

「そりゃあ、今すぐ抜け出したいけど、どうすることもできないし、

それにいい考えがあるから」

「いい考え?？」

「そうそう、でも今はまだ、ない・しょ！」

アヤネがウインクをする。

「それなら、このまま館山に行くことでいい!？」

「いいですわ」

「いいですよ」

「いいよ」

「もちです」

「……了解」

各々が返事をして、今後の行動方針が決まった。

「それなら、今から解放軍のコミユに行くから……マサとシノミ来てくれる。他のメンバーは、今のクランの倉庫に保管してある武器弾薬のチェックをお願い。」

「クランの倉庫？」

雅一が質問する。

「このゲームは、作戦中、MCDにアイテムをいれる事が出来ないの。だからポーチやベルト何かに収納していくんだけど、クランの倉庫は、ゲッターか米軍の基地に行けば、いつでも出せるような仕組みになっているの。だから、こういう時には便利なのかもね。」

「なるほど」

「それなら、一時解散！」

カノンの声にみんながそれぞれの役目を持って行動する。

「シノミ、マサ行くわよ！」

カノンが二人を連れて休憩所抜けて、人通りの多い道へと出てくる。

「ヒメの事なら大丈夫よ。みんながいるし……」

先ほどから後ろを気にしていたシノミに声をかける。

「そうですけど……」

シノミは、やはり気にしている。

「ところで、解放軍のコミュってなんだ？」

このゲームを始めてやる雅一にしてみれば謎だらけだ。

「コミュは、一種の情報室みたいな役割を果たしているの、そこで各ゲッターや基地ごとで情報のやり取りが可能なの。」

「へえ〜」

やたらこのゲームは細かい設定にこっているな、と思いながら雅一はカノンの後を追う。

カノンがある部屋に入って行ったので付いて行く。

中には、結構の広さがあり、真ん中にデカイモニターがあった。

「これは、生き残ったんですね。」

そして、三人の男性がいた。

「どうも」

「あなたたちは、クラン組んでるの？」

反応したのが、小太りでいかにもでかいサングラスをかけた男の人が答える。

「いえ、違います。我々は、フリーの傭兵で、この不測の事態に対処するために一時的に協力することにしたんです。名前を言い忘れましたが、私は山田曹長といいます。」

そういうと、後ろにいた二人の男性も出てきて敬礼をしながら名前を言う。

「わたくしは、佐藤二等兵であります。」

坊主頭でガリガリの体系の人だった。

「自分は、鈴木伍長です。」

アフロに小太りの男だった。

「よろしく、私はカノン。克蘭“月下の灯”のリーダーをしています。」

「俺は、ミノマサ」

「私は、シノミ」

それぞれ自己紹介する。

「それで、カノン殿。貴方たちも任務を受けたのですか？」

山田曹長と言う人が聞いてくる。

「そうよ、館山まで行かないといけないの」

「おお、それは私たちと同じです。」

「そうなんだ」

「私は得た情報によりますと、東京湾にあるアクアラインを米軍が抑えたいので、そこを通れば簡単に行けるらしいです。」

モニターを指さす。そこには、アクアラインの神奈川側に青いマークがついている。

「情報ありがとう。それなら、私たちもアクアラインを通って行きましょう。貴方たちは何時行くの？」

「私たちは、二日後を予定しております。」

「私たちもそれぐらいかな。」

「それで、カノン殿。一つ提案なのですが、米軍のハンヴィーを一括購入しませんか？」

「ハンヴィーね……ちょうど家でも二台ほど買いたいと思っうちてたところなのよ。」

ハンヴィーは、アメリカ軍が使っている高機動多用途装輪車両の事で、その民用品がハマーと言う名前で売られているのが有名な車だ。

「なあ、カノン。何で一括購入するといいんだ？」

雅一がカノンに小声で話しかけるとカノンの方から小声で返答が来た。

「このゲーム、一括で買うとかなり安くなる時があるの。そういう所はリアルよね。」

「それでは、カノン殿。ハンヴィーを三台購入します。」

「よろしく」

山田曹長がモニターで操作している。

「ハンヴィーのハンガーが11番と12番と22番です。私たちは、22番を使いさせていただきます。」

「わかったわ」

「それでは、ご武運を！」

「ご武運を！！」

「グッドラック！」

三人は敬礼をして部屋から出て行った。

「ハンガーって何のことだ？」

雅一がまたカノンに質問をする。

「自分の車なんかを改造できる場所のこと、ゲッターごとにあるわ。」

「なるほど。車庫のことか？」

「そんな、センスのない名前じゃあ、却下ね」

「センスがなくて悪かったな」

カノンが一呼吸おいて

「それじゃあ、明日は、ハンヴィーの改造としましょう！」

カノンがウキウキで出て行き、それをシノミと雅一が付いて外に出た。

“月下の灯”は、アクアラインを経由して館山と向かうのであった。

0 ' 3 受諾（後書き）

東京湾に浮かぶアクアラインという表現をしましたが、そのまんま東京湾アクアラインをモチーフとしていきます。

今は、戦闘シーンもなく、説明ばかりですが、今後ともよろしくお願ひします。

0 / 4 準備

「みんな〜〜作戦決まったから来て〜」

カノンたちは、休憩所に戻ってきてから、全員を集めた。

「まず、アヤネ。武器弾薬どうだった？」

「ちょっとたりないかな？軽機関銃系を買わないといけない。」

「武器の類は、後で決めて……そうそう作戦は、アクアラインを経由することにしたから、そしてハンヴィーを二つ購入したから、アヤネやシマリ改造よろしく」

「ハンヴィーですか？腕が鳴ります」

「アクアラインを経由……危険じゃない？」

アヤネが少し思い出してカノンに聞く。

「大丈夫みたい。何でもアクアラインは米軍がおさえているから」

「それなら……でも、ハンヴィーは重武装にしないと、ハンガーどこ？」

「11、12番よ」

「わかった、シマリとキリ行くよ！」

「わかりました」

「……うん」

三人が走って行くと

「私も行きます。ほら、ヒメ行くよ」

「わかりましたわ」

「いつてらっしゃい」

シノミとヒメも後を追う。

「私たちは、武器の確認と、地図を見てルートの確認」

「わかった」

「あいあいさー」

「ラジャー」

雅一とシモハルとカエデが下手くそな敬礼をする。

「バカやってないで、武器の確認から」

「武器は……M4、M16、M21、M24、M60、AT4C
Sやっぱり米軍の武器が多いな……」

「そりゃ、安く済むし。でも、中東からの横流し品を売っていると
ころや、欧州の武器を売っているところなんかもあるわよ」

「このゲーム相変わらず凝ってるな……」

その後、武器と弾薬を確認してから、ハンガーへと向かった。

「調子はどう!?!」

11番のハンガーへと入って行っただ。

「順調よ。私がハイスペックに改造してるから」

ハンヴィーの原形はとどめている。

「それで、追加で武器を購入してほしいの」

「どれ?」

「ハンヴィーの上部に着けるMk・19 自動擲弾銃とM2重機関
銃をそれぞれ一丁と、M249を6丁買ってきて、弾薬も多めで」

「そんなに乘せたら重量オーバーになるんじゃない？」

「大丈夫！私とシマリに任せなさい」

「そうです」

ハンヴィーの下からシマリが顔を出す。

シマリの顔は、少しの部分が炭で黒くなっていた。

「それじゃあ、私は武器と弾薬を買いに行くから。マサとカエデと
かも手伝ってあげて」

カノンがハンガーから出ていく。

「そういえば、お金って大丈夫なのか？」

雅一が隣に座っていたシモハルに聞く。

この世界に来てからお金の事をまったく考えていなかった。

「大丈夫、何て言ったって家のクランは、^{うち}ランクがAなんですから
！」

「ランクがA？」

「はい、クランの中にもランクがあつて、S～Eまであるんです。
そしてランクが高いほど報酬が高額な任務を受ける事が出来るんだ
よ。だから、お金はよっぽどのことがない限り心配しなくてもいい
よー！」

「とんでもないクランに入っただよ……」

「なぐに。タイタニックにでも乗った気持ちでいても大丈夫だよ」

「それは、沈むだろ!!」

「てへへ、気にしない、気にしない」

一日と半日かけてハンヴィーの改造が終了してから全員が集まり最終確認をする。

「作戦名は、“Operation Light daybreak” アクアラインを通って館山まで行くことが任務。改造されたハンヴィーには、それぞれ“ルナ”と“アルテミス”と呼称。」

ハンヴィーの改造された姿に雅一は驚いてしまったのだ。

ルナと呼称されることになったハンヴィーは、上部にM2が設置されて、助手席にも前方と横がカバーできるM249が設置されていた。後ろ窓から撃てるようにM249が設置されてほぼ全域がカバーできるようになっていた。改造した本人いわく「防弾ガラスや、装甲と、後エンジンにも手を加えたわよ」と少し笑いながら言っ

いた。

アルテミスと呼称されるハンヴィーには、上部にMk・19 自動擲弾銃というグレネードマシンガンが搭載されている他は、ルナと同じになっている。

「ルナには、シマリが運転手で、助手席にはキリ、上部がアヤネ、後部がカエデで。アルテミスは、運転手が私で助手席がマサで、上部がシノミ、後部がシモハル、補助がヒメ。こんな感じかな？」

「言い忘れてたけど、助手席の人が無線連絡役だから。」

アヤネが付け足す。

「補助とは何をすればよろしいのですか？」

ヒメが首をかしげる。

「補助は……補助よ！」

カノンが顔を合わせずに早口で言う。

「そうそう、ヒメはもしもという時の隠し兵器よ！」

シノミも慌ててカバーに入る。

「隠し兵器ですの。責任重大ですわね」

当人たちの本音を意図せずに勝手に気合を入れるヒメだった。

「これで、終わりかな？それじゃあ、明日の明朝と言っよりかは、深夜の2時半に起きて準備をして夜明けとともに出かけるわよ。それじゃあ、解散！」

全員が早めに寝て。

太陽が薄らと見えてきたときにハンヴィーがハンガーから外に出た。

0 装備

メイン・・・主力銃、メインアーム
サブ・・・主力銃の補助をする銃
ピストル・・・拳銃、サイドアーム

ミノマサ

メイン M 4 M 2 0 3 グレネードランチャー 装備
サブ M P 7
ピストル M P ・ 4 3 3

カノン

メイン M K 4 8 M o d 0
サブ U Z I
ピストル シグ ザウエル P 2 2 6

ヒメ

メイン 8 9 式小銃
サブ なし
ピストル ワルサー P P S

シノミ

メイン G 3 6 C

サブ H & a m p ; K U M P

ピストル グロツク 1 8 C

シマリ

メイン A U G A 3

サブ M A C - 1 1

ピストル グロツク 1 7

アヤネ

メイン S G 5 5 2

サブ F N P 9 0

ピストル ファイブセブン

カエデ

メイン M 2 1

サブ スパス15

ピストル ワルサー P99

キリ

メイン M16A4 銃剣装備

サブ MP9 サイレンサー装備

ピストル ベレッタ M92 エリートIA サイレンサー装備

シモハル

メイン M24

サブ ベネリ M4 スーペル90 米軍のM1014

ピストル ニューナンプM60

ハンヴィー

ルナ

M2

M249x2

アルテミス

M k . 1 9 自動擲弾銃
M 2 4 9 x 2

予備

M 2 4 9 x 2

M 4 x 3

バレット M 9 5 x 1

A T - 4 C S x 3

M 6 7 破片手榴弾 x 多数

スタングレネード x 多数

スモークグレネード x 多数

0 装備（後書き）

それぞれの性格にあった装備にしてみました。

もし、わからないのがあった場合、Wikipediaなどで調べてください。

作中の中では、すべて出していきたいと思います。
その時に簡単に説明すると思います。

1 夜明けの銃弾による歓迎（前書き）

Googleマップと睨めっこしながら書きました。

1 夜明けの銃弾による歓迎

それぞれのハンヴィーに乗って地上へと出る。

川崎駅から少し離れた住宅街から出れた。

全員、都市迷彩の服に、ボディーアーマーを着ている。随分重たいのだが、飛んできた破片や、拳銃の弾ぐらいなら防げるということ、で、全員着用している。

「まずは、アクアラインまで向かわないと……」

カノンが運転しながら言う隣に座っている雅一が

「そういえば……あの三人組どうなったんだろうな？」

「さあ？でも、深夜に22番ハンガーに行ったら誰も返事がなかったから、私たちより早く出たんじゃない？」

「そうなのか……」

雅一は、印象的だった三人の事を思い出しながら、廃墟を眺めていた。

競馬場らしき残骸を横切り、人が誰もいない大通りを二台のハンヴィーが走っている。

「こちら……ルナ……こちら……ルナ……応答……して……」

雅一の横に置いてある無線機からキリの声が聞こえる。

「こちら、アルテミス。キリ、何でとぎれとぎれなんだ？」

「……それは……」

「それは、キリの話し方だから気にしないの」

カノンが隣からいきなり口をはさむ。

「……そう……」

「そうなのか……キリ、どうした？」

「……ルナ……って呼ぶ……」

「何で？」

無線を持ちながら疑問に思っている。ちなみに、無線は雅一の横に置いてあり、ハンヴィーの屋根と前と後ろの三か所にアンテナがついている。

「そんなの作戦中なんだから、敵に無線を聞かれたときに情報を特定されちゃうでしょ。」

「そんなの、ここは味方の範囲なんだろう？」

「気を抜かずに、いつも考えるの」

「はいはい。それで、ルナどうした？」

ルナと呼ぶのに少し抵抗感があつたが何とか言つ事が出来た。

「…異常…ない？」

「ああ、ないぞ」

カノンが運転しているアルテミスが先行して、シマリが運転しているルナが後ろから付いて来ている。

「…それなら……通信終了…」

その言葉と共に無線からノイズが聞こえる。

国道409号線を東進していく。

川崎駅より小さい駅の前に差し掛かった時に、後ろからシモハルが口を開いた。

「平和だね……。敵もいないし、人の一人もないよ……」

「物騒なこと言わないでください。本当に来たらどうするの!？」

「まあ、そんな時は、そんな時で」

「大丈夫ですわ。心配しないで、美夏ちゃん」

「はあ……。そうですか……」

後ろで賑やかになっている。

「平和だな」

前の方を念入りに観察している雅一が独り言をつぶやく。

「このクランの売りよ！」

カノンが横から自慢げに言った。

そのまま何事もなく1キロ進んでいくと捨てて錆びついている車の残骸が放置されているところを通る。

「海が見える。」

「もうすぐ、アクアラインね。」

短い橋を越えて石油タンクの横を通ると、カノンが速度を落とす。

「この先は、米軍が押さえているらしいけど、何があるかわからないから、全員戦闘準備。マサ！シマリ達にも連絡して」

「了解」

雅一がすぐに無線のスイッチをオンにする。

「こちら、アルテミス。こちら、アルテミス。応答してくれ」

「……こちら……ルナ……こちら……ルナ……」

「ルナ、ここから速度を落として戦闘準備してくれ。もしも何か会った時は、首都高速湾岸線に乗って逃げるから、そのことを伝えてくれ。」

「ルナ……了解……」

スイッチをオフにして、雅一はM249を目の前に置いて固定する。同じようにシノミがMk・19 自動擲弾銃を構える。後部でも、シモハルがM249を出してきて固定する。

もう一つのハンヴィーも同じように、アヤネが上から顔を出してM2を構えたり、キリがM249の準備をする。

「それでは、行きましょうか」

アクアラインの料金所が見え始めると、そこに土嚢などで作られた簡易陣地が敷かれていた。

「警戒重に」

進んでいき、料金所まで行くと一人の兵士がこちらに来る。

「こちら、アクアラインを守っている米軍です。MCDを見せてく

ださい」

NPCらしい、無機質な声が聞こえてくる。

「はい」

カノンがMCDを渡す。

「認証確認、どうぞ」

MCDを見てから返す。

「それでは〜」

カノンたちのハンヴィーが料金所を過ぎてトンネルの中に入っていく。

続くようにシマリ達のハンヴィーも料金所を過ぎていく。

「これで、一安心ね。情報通りだった、っていう事かしら。警戒を解くように連絡して」

雅一は、聞くと返事もせずに無線を入れて

「こちら、アルテミス。警戒終了。警戒終了」

「……こちら……ルナ………了解」

すぐに無線を切る。

トンネルの中は、薄い黄色の蛍光灯で照らされていた。

進んでいき、半分を過ぎて6、7？地点で、爆発音と銃撃音がトネルの中で響く。

その音と共にカノンがブレーキをして、ハンヴィーを止める。同じようにシマリもハンヴィーを止める。

シマリが運転席からでてきて、こちらに来る。

「何があつたんでしょうか？」

「さあ？でも、ちょうど出口から聞こえてくるよね」

「そうですね」

話し込んでいると無線から声が聞こえた。

『こちら、解放軍！！こちら、解放軍！！現在、アクアラインの旧海ほたるPAで、敵と戦闘中、至急応援を頼む。こちら、解放軍……こちらかい……ドーン……！！……ザザーザザー』

「これって……まさか私たちはめられた？」

カノンの叫びがトンネルの中で木霊した。

1 夜明けの銃弾による歓迎（後書き）

書いて圧倒的に自分のRPGに対する知識不足を思い知らされました。

なので、スキルや魔法を募集します。

主人公は、武器が剣で、素早さを重視です。

強い魔法、スキルから、ネタ系の魔法、スキルでも何でもいいです。

名前と、効果などを書いて送ってください。

助けてくださいお願いします。

2 畏と知りながらの強行突破（前書き）

今回の話から、擬音をなくすことにしました。

2 罖と知りながらの強行突破

『こちら、解放軍！！こちら、解放軍！！現在、アクアラインの旧海ほたるPAで、敵と戦闘中、至急応援を頼む。こちら、解放軍……こちらかい……！！………』

爆音と共に無線が途切れる。

「これって……まさか私たちはめられた？」

カノンがトンネルの中で叫んだ。

「かもな、たぶん戻っても同じことだろうな」

「あちゃーどうしよう」

カノンが頭を抱える。

「どうしましょう」

シマリも顔を下に向ける。

少しの間、沈黙ができる。

「突破でいいんじゃない？」

アヤネがハンヴィーの上から大きな声で言う。

「でも……………」

「何とかなるでしょ！」

「そうそう！」

カエデとシモハルも賛成する。

「それなら、バーキングエリア P Aを強行突破するわよ。みんな準備を」

全員の準備をし始める。

M 2 4 9 の弾を確認する。

M 2 4 9 とは、軽機関銃の事で、5 . 5 6 x 4 5 m m N A T O 弾を使う事が出来る。威力は普通の軽機関銃より劣るが、取り回しと機動性においては、かなり使いやすい軽機関銃となっている。

アヤネもM 2 の準備をしている。

M 2 とは、第二次世界大戦から、ずっと使い続けている銃で、1 2 . 7 m m の大型の銃弾を打ち出す事が出来る重機関銃だ。

シノミがM k . 1 9 自動擲弾銃をいつでも発射できるようにしている。

M k . 1 9 自動擲弾銃とは、グレネードを連続で発射できる銃で、対人用の手榴弾を遠くに打ち出すような感覚で使うものだ。

「それじゃあ、行きますか」

カノンが運転席から叫ぶ。

「了解！」

「了解です」

「あいあいさ」

「行きましょう」

「花火でも打ち上げるわよ」

「頑張りますわ」

「レッツゴー」

「……了解……」

カノンがエンジンのアクセルを思いつきり踏んで加速していく。
シマリもそれに続いて後ろから車間距離20メートルぐらいを開けて続く。

重い銃撃音とコンクリートが砕ける音が近くで聞こえてくるようになる。

雅一が唾を飲み込む。

「さあ、いくわよ!!」

カノンの掛け声とともに、さらにアクセルをふかして、時速120キロまで行っていた。

「マサ！無線は、常にオンにしてて」

「了解」

スイッチをオンにして

「こちら、アルテミス。これから無線を常時オンにしてくれる」

「…ルナ……了解…」

日の光が見えてくる中、ハンヴィーが戦場へと飛び込んだ。

真っ赤な空から青空に変わっていた。

そこに、3、40人の兵隊が群がっていた。

敵がこちらに気付き、銃弾を撃ってくる。

それが、ハンヴィーの装甲に当たって火花を散らしている。

全員も反撃に出て、M249からは5.56x45mm NATO弾を降り注がせる。

雅一も前に向かって撃っている。

薬きょうが横に散らばっていく。

敵が倒したかどうかは良く分からず、ただリズムよく撃っている。

雅一が、ふと横を見ると、ハンヴィーの残骸があった。

「…これは……」

ハンヴィーが燃え上がっており真っ赤に染まっていた。しかし、人影はなかったのだ。

「あの人たちなのかな？」

一瞬の時間だけ思い出したのだが、すぐに戦場へと連れ戻される。

「マサ！銃弾交換！！」

横で運転しているカノンが叫ぶ。

「ああ！すまん！！」

すぐにM249の弾倉を交換する。しかし、時間を食ってしまい。目の前に敵が5、6人がこちらに撃って来ようとしたのだが、爆発

音と共に吹き飛ぶ。

「ぼさつとしない!!」

シノミがMk・19 自動擲弾銃を撃ちながら大きな声で言う。

「すまん!!」

M249の弾倉を交換すると、すぐに銃撃を敵に浴びせる。

まだ、一キロも進んでいなかった。
でも、時間がとても長く感じている。

もう一台のハンヴィーでも必死に抵抗している。
アヤネがM2から、12.7mm弾を吐き出しながら敵を巻き込みながら倒している。
カエデも、後ろから来ている敵に銃弾を浴びせる。

ハンヴィーが揺れる。

路が悪いのもあるのだが、無理やり土囊の上を飛んでいるからだ、
何回跳ねたのか、わからない。

本来、二車線なのだが真ん中の区切りが、銃弾により削り取られて
おり、原形をとどめていなかった。

ようやく、1? 超えそうな時に、後ろから周りの音を全てかき消すぐらいの轟音が響く。

プロペラが回っている音だった。

「まさか! ヘリ! ?」

後ろから、5機のズングリむっくりなヘリが重いローター音を鳴らしながらこちらに近づいていた。

3 知られざる天然スキルの一発

シノミが叫ぶ。

「まさか…ハインド!？」

「ハインドですって!？」

カノンも運転席で驚いている。

ハインドと言うのは、ソ連の戦闘ヘリMi-24Dで、戦闘ヘリとしてはサイズがでかいが、対地攻撃能力においては、かなり優秀なヘリとなっている。さらには最大八人も人員輸送ができる。

「カノン！地対空兵器、積んでないのかよ！」

「そんなのあるわけないでしょ！」

「どうするんだよ!？」

「知らないわよ!！」

カノンと雅一が口げんかを開始する。

『どうするんですか？結構ピンチですよ!』

無線からシマリの声が聞こえてくる。

「どつしどつ……」

こちらに考える暇も与えずにハインドから、12・7mm4銃身機銃から銃弾が吐き出される。

それが、コンクリートに当たり、塵ちりとなって風に乗って舞う。

ハンヴィーにも数発かするが、致命傷は受けていない。

ハンヴィーを右に行ったり左に行ったりとフェイントをかけながら進んでいるが、徐々に照準が正確になり危ない場面が多くなる。

「この！」

シノミが、Mk・19 自動擲弾銃を撃ちこみ、一機の機銃に命中して打てなくなったのだが、横についている短固定翼からS・5ロケット弾が反撃として送り返される。
横で爆発して

「うわ！」

シノミが下に落ちてしまう。

「よくも！美夏ちゃんに危険な目をあわせましたわね」

ヒメが、AT-4 CSをもって上部ハッチから出る。

AT-4 CSとは、対戦車弾を打ち出す事が出来る使い捨ての武器で、後ろに爆風バックフラストが出ないようになっている。

「ヒメ危ない！」

「ヒメやめておけ」

シノミと雅一が叫んだのだが、ヒメが外に出てシノミを狙ったハインドに照準を合わせて撃つ。

轟音と共に成形炸薬弾が放たれてハインドにうまく当たる筈だったのだが

「あれ……………間違いましたわ」

銃口を後ろに向けて撃つたために後ろに成形炸薬弾は飛んでいく。

「ヒメ……………」

シノミは、内心ほっとした気持ちになったのだが

次の瞬間に豪快に爆発音になり、海面に着水する音が響き渡す。

「え……………」

シノミが驚き

「やりましたわ!」

ヒメが驚いていた。

その光景を雅一は一部始終見ていた。

「ヒメやめておけ」

叫んだのだが、ヒメがAT-4 CSを撃つ。それが後ろに向かつて撃たれて、雅一はさすがヒメだなと思っていたのだが、それがなんと電信棒の根元に当たる。

そして、爆風と共に電信棒がブーメランのように回転していきながらハインドを巻き込む。

ハインドの真横に直撃して操縦不能となったところで他のハインドに当たり爆発。

もう一つのハインドも爆発に巻き込まれて、そのまま海に突っ込んだ。

「なんじゃ、こりゃ……………」

雅一は、この一連の流れを信じられないで見ていた。

「一石二鳥とは、このことだな」

自分で勝手に納得してしまった。

「やりましたわ！美夏ちゃん」

ヒメが下に戻ってきて喜んでいる。

ちなみに、A T - 4 C Sは、反動と共にヒメが耐え切れずに手を放してしまい地面に落ちてしまった。

「……そうね」

シノミも信じられずに座り込んでいた。

「ヒメちゃん！やる〜」

後ろに向かって銃弾をばら撒いていたシモハルがヒメの方をむく。

「シノミ！早く持ち場について！」

カノンが前から大声で言う。

「は、はい」

すぐに上に戻って、M k ・ 1 9 自動擲弾銃を撃つのを再開する。

その間に、アヤネがM2で、プロペラ部分を当てて一機ハインドを落としていた。

あと二機は、健在で一機は機銃が撃てず、ロケット弾を当ててけん制してきている。

もう一機は、機銃が健在でこちらに銃弾の雨を降らしている。

その間にも、後ろからトラックに乗って追ってきている兵士がいた。そいつらが、AK 47で撃ってきている。

まだ、少ししか進んでいなかった。

2?と500m過ぎたぐらいに、ジェットエンジンの音が聞こえてきた。

「今度は、何!？」

『たぶん、ソ連の戦闘機のSu-27です。しかも爆弾積んでるみたいですよ、カエデが言ってます』

無線からシマリの声が聞こえてくる。

Su-27は、ソ連の戦闘機で長大な航続距離とミサイル搭載能力も持ち合わせている

「何で、戦闘ヘリに、戦闘機まで来るのよ！？やっぱり、マサ！疫病神！！」

「俺は、関係ないだろ！！」

ハンヴィーに、戦闘ヘリと戦闘機が襲い掛かる。

4 もう一つの戦いでの航空支援

ジェットエンジンの音が近くなってきた。

さらに、戦闘ヘリからも攻撃が激しくなる。

「もうだめなのか!!」

雅一が叫んだ瞬間、戦闘ヘリが爆音を立てて、落ちて行き、戦闘機も落ちていく。

そして、前から六機、戦闘機が飛んできた。

『こちら、フラワーリング。これから航空支援を開始する』

「ナイスタイミング!」

カノンが大声で喜ぶ。

後ろが爆風に包まれた。

くフラワーリングく

館山の飛行場で休んでいた時に突如、無線から緊急支援の要請が来

た。

『こちら、解放軍！！こちら、解放軍！！現在、アクアラインの旧海ほたるPAで、敵と戦闘中、至急応援を頼む。こちら、解放軍……こちらかい……！！……！！』

爆発音と共に無線が途切れたのだが、飛行場にスクランブルのサイレンが鳴る。

黒髪のロングで、周りの人からは高嶺の花と言われている人が走ってこちらに来る。

「私たち、フラワーリングに出番よ！みんな乗って！」

十二人が返事をして、ハンガーにおいてある戦闘機に乗る。それぞれの戦闘機には、たんぽぽの花の冠が書かれている

『こちら、HQ。クラン“フラワーリング”は、至急アクアラインまで味方の支援に行ってください。レーダーによれば、戦闘ヘリ5、戦闘機2、その他地上目標多数。』

HQとは、ここでは館山統合司令部のことを指す。若い女の人がなれていな様子でアナウンスする。

統合司令部には、常時アルバイトの人か、運営側の正社員がいる。今回、HQにいた女性は、たまたまアルバイトしに来た時に、このゲームに巻き込まれてしまったのだ。出られる方法がないなら、戦うより、こっちの方がいいと言ってHQの仕事をこなしている。

「こちら、クランリーダー了解。源さん！！NPCの整備兵に3機に爆装《爆撃装備》と、3機に対空ミサイルを搭載して！」

黒髪の人が、30代後半の体がしっかりしている男の人に向かって叫ぶ。

「あいよ！！F 15Eの三機に爆装と、F 14Dの三機をAAM-5を装備する」

NPCの整備兵たちが、次々とミサイルなどを取り付けていく、すごいスピードとこなす。

F 15Eに爆装を取り付けている。

F 15Eは、別名ストライクイーグル。F 15イーグルの発展バージョンだ。この機体は、空戦格闘性能はもちろんの事、爆撃を装備するところ…ハードポイントと呼ばれる場所が多く存在して爆弾の搭載量は多い。複座…二人乗りの戦闘機だ。

F 14DにAAM-5を取り付ける。

F 14Dは、トムキャットと呼ばれており、可変翼で、格闘性能、レーダーの性能がいい。複座…二人乗りの戦闘機だ。

AAM-5…04式空対空誘導弾は、近距離専用のミサイル。

4分が経過したぐらいで源さんと呼ばれている人が、無線でパイロットに連絡する。

「F 15Eの二機を最初に離陸しろ！」

「了解！みんな、F 15Eそれぞれのコールサインは、コーラル1、2、3よ。F 14Dがハンター1、2、3。」

「ラジャー！」×11

全員、女性の声だった。

「HQ、こちら、フラワーリング離陸準備が整いました」

『こちらHQ。了解、HQのコールサインをボックスマウンテンと呼称』

「こちら、フラワーリング了解。離陸します。コーラル1、2から行くよ！」

「了解」

幅が広い滑走路から灰色一色のF 15Eが離陸する。

その後、青色のF 14Dと灰色のF 15Eが続いて離陸して、最後に青色のF 14Dが離陸する。

房総半島のはっしから、海に出て低空飛行で、アクアラインを指している。

六機が、三機、三機の変則的な三角形の編隊を取っている。

「こちら、コーラル1。ハンター1、2、3が先行し空に飛んでるハエ退治を、そしてコーラル1、2、3がアクアラインにいるゴキブリ退治。わかった!？」

「こちら、ハンター1。ウィルコ」

「ハンター2も同じく」

「ハンター3、先に行ってエスコートしますね。」

F 14Dが翼を小さくして海上を先行する。

「ハンター2、いっちょねずみ花火でも上げましょう!」

「ハンター3、ゴキブリはホイホイですね」

F 15Eの三機がそれを追う。

レーダーに敵機が写る。

「こちらハンター2、敵さんの数が減ってます。ヘリが2」

「コーラル1、陸でなかなか頑張ってるみたいね。私たちもいくわよ!」

「コンタクト」

F 14Dの操縦席の後ろに座っている人が言う。

「ハンター2、フォックス・ツー」

「ハンター3、フォックス・ツー」

F 14Dの両翼から一発ずつのAAM-5が発射されて、それが吸い込まれるかのように戦闘ヘリに直撃して火花を散らせる。

「ハンター1、フォックス・ツー」

F 14Dの両翼から一発ずつのAAM-5が発射されて、敵のSu-27が避けようとするが、一発が近くで爆発して操縦困難になったところを、もう一発のAAM-5で仕留められる。

「ハンター1。これからドックファイトをやる。ハンター2、3フォローよろしく」

「ハンター2、ウィルコ」

「ハンター3、派手に暴れてちょうだいな!」

ドックファイトとは、空中格闘戦闘のことで、近づいて戦闘を行うことだ。

F 14 DがSu-27に近づいていく、そして敵から機銃とミサイルが飛んでくる。

「近いからミサイルは当たるか！」

ミサイルが近づいてきたら一気にアフターバーナーにより、一気に加速する。

アフターバーナーは、一時的にすごい加速力を得られるが、燃料の消費が極端に悪い。

ミサイルをよけてから

「フォックス・スリー」

F 14 Dのバルカン砲が火を噴く。

そして、轟音の爆発により炎の塊が出来たところを、ぎりぎり横から突き抜けていく。

「ハンター1、ハエは全て落としました」

コーラル1のパイロットがオープンでいう。

「こちら、フラワーリング。これから航空支援を開始する」

そして、すぐに目標に食らいつく

「コーラル1、グッジョブ！コーラル2、3。次はゴキブリたたきをするよ！」

「コンタクト、エンゲージ」

F 15Eの一機が旧海ほたるPAの上に自然落下爆弾を八発落とす。

轟音と共に、コンクリートと、肉塊が飛び散る。

「ハンター2、エンゲージ」

「ハンター3、エンゲージ」

「二人とも、味方に当てなよ」

ハンター1の心配も杞憂で終わり、ハンター2の爆弾がハンヴィーの数十メートル後ろで見事に爆発して、さらにハンター3からも爆弾の雨を降らせて大ダメージを与えた。

「コーラル1、目標オールグリーン。帰るよ！」

「コーラル2、ウィルコ」

「コーラル3、早く帰ってシャワー浴びないと」

「ハンター1、手ごたえなさすぎ！」

「ハンター2、これからすごくなるって」

「ハンター3、不吉なことを言わない」

コーラル1に乗っている女のパイロットが、無線をオープンにして

「こちら、フラワーリング、航空支援終了。後は、頑張って!!」

無線を普通に戻して、

「こちら、フラワーリング。ミッションコンプリート」

『こちら、ボックスマウンテン。ご苦労様』

HQに連絡した後

「全機、帰還!!」

コーラル1のパイロット、“フラワーリング”のクランリーダーのミサキが全員に連絡した。

唯一のルールは、視界外戦闘禁止のみで戦うGTCの空を駆け抜けるパイロットたちのお話。

4 もう一つの戦いでの航空支援（後書き）

パイロットの話も変則的に載せていきたいと思います。

基本、主人公がメインですが……………

このパイロットたちは、今後も登場します。ハンドルネームも、その時にわかるかと（予定）。

ウィルコの意味

「了解」

または、「命令を快諾しました」

作中に出てきたフォックス（fox）の解説

戦中に自機が攻撃を行うことを味方へ伝える符丁。使用する兵装によりフォックスの後ろに数字を付ける。分け方としては以下のとおり。

フォックス・ワン（Fox - One）：ミサイル発射の際、友軍機に注意を促す符丁。米空軍／海軍ではセミアクティヴ／アクティヴレーダーホーミング・ミサイル（スパロー／AMRAAM）の発射。航空自衛隊の場合、中距離ミサイル（スパロー／AMRAAMなど）。

フォックス・ツー（Fox - Two）：ミサイル発射の際、友軍機に注意を促す符丁。航空自衛隊の場合、短距離ミサイル（サイドワインダーなど）。

フォックス・スリー（Fox - Three）：ミサイル発射の際、友軍機に注意を促す符丁。米空軍および航空自衛隊の場合は、機銃

の
発
砲。

5 ガソリンと突然の連絡をつげる無線

く月下の灯く

爆風によって視界が悪くなり、熱風が来ていた。

それによって、敵が減ったのはよかったのだが、視界を防がれていたために至近距離にくるまで、RPG 7の弾頭が見えなかった。

「まずい!!」

シマリが叫んで、ハンドルを切ったのだが少し遅く、真横に爆発する。

そのままハンヴィーが横転する。

「大丈夫!!」

カノンが敵の銃撃の中、走って横転したハンヴィーに近づいていく。

「なんとか……」

シマリが瓦礫を取り払って中から出てきた。

「まったく、ひどい目にあつたものよ」

他の三人も、何とか出てくる。

「早くこっちに！」

カノンが透き通る大きな声で言っ、他の四人もついてくる。

その間、シノミや雅一がM249をぶっ放して、援護射撃をする。

「煙巻いて！」

カノンの言葉に、シノミがスモークグレネードを5、6個投げてから、M67破片手榴弾を2、3個投ると轟音を鳴らす。そして、一時的に敵の反撃がやむ。

「早く、乗って！」

カノンが運転席に乗って叫ぶ。

「定員オーバーじゃないのか!？」

雅一が隣の席からもっともらしい事を言う。

「このハンヴィーを信じましょ」

二人が中に入って、アヤネとキリがはっしここに捕まり、ハンヴィーを動かす。

そのまま、敵の銃撃は単発的にあつたのだが、何とか料金所が見えてくる時に、カノンがしまったと言う顔して、後ろに向いて言った。

「ごめん……ガソリンが漏れてた」

「まじで！」

雅一が叫んだ後に、アヤネが周りを確認すると、黒い液体がタイヤを伝って、流れ出ていった。

「流れ出ている」

「やっぱり……」

「どうするんだよ」

「そうね……」

カノンが料金所から100m辺りで、ハンヴィーを横に着ける。

「武器をすべてもってきて、マサは、無線機を持ってきて」

「了解」

全員が走って行き、雅一は無線機を大事そうに抱えながら進む。最後にカノンがハンヴィーに何か仕掛けをしてから、こちらにきた。

「作戦を言うから、よく聞いて」

カノンたちが、料金所に簡易防衛陣地を設置してからカノンが口を開いた。

「無線で、タクシーを呼ぶから、場所は、緯度35経度140のゴルフ場の所。それで今から三つに分けるから、しっかり聞いてね」

カノンがMCDに表示されている地図を見せた後に紙に文字を走り書きさせる。

「一つは、東に行つてギリギリまで川を渡らずに行く部隊。南に行つて、その途中で東に行く部隊。この場所にとどまって防戦したのち、直線距離で行く部隊の三つに分ける。最初の部隊のコールサインをソウイルにして、1、2、3をそれぞれ、アヤネ、ヒメ、キリ。次の部隊のコールサインがテイワズ 1、2、3をそれぞれマサ、カエデ、シマリ。最後の部隊のコールサインがアンサズ、1を私、2をシノミ、3をシモハル。その場所の到着時間を今から24時間後の8時にするわ。だから早く来すぎてもダメだから時間調整は各自でよろしく」

走り書きのメモを雅一とアヤネに渡す。
敵の銃撃が激しくなったために、質問をする暇もなく、移動を開始した。

「ソウイル」

カノンたちのいる料金所を離れて歩き出す。
幸いにも武器は無傷のために、有効に使える。

「キリ。ヒメのサポートよろしくね」

「…うん」

カノンがアヤネにヒメを預けた理由は、シノミの火力支援も欲しかったためもあるが、なるべく安全に行けるとフンでの、ことだろうとアヤネは推測した。

「さて、行きましょう」

三人は、慎重に進んで行った。

く
テイワズ

「そつえば、タクシーってどういう意味だ？」

雅一が、大通りを歩きながら、横を警戒していた二人に聞いた。

「タクシーは、輸送ヘリを呼ぶこと、大抵お金がかかるから、GCTでは、タクシーって呼ぶの」

「なるほどな…何事にも金はあるんだな」

三人は、警戒しながら進んで行った。

くアンサズく

「みんな、ごめんね」

カノンがM249の弾薬を取り換えて、防衛できるように構築しつつ、敵からの小規模の銃撃に反撃をしている。

「それは、いわない約束でしょ！」

シモハルが、笑いながら言う。シノミも頷く。

「それで、館山に連絡しないと」

無線機のスイッチをオンにして、緊急用の回線を使って、連絡を取る。

「こちら、クラン“月下の灯”。館山統合司令部、応答してください」

『……………こちら、館山統合司令部。月下の灯のみなさんですね』

若い女性の声が聞こえてきた。

「はい、タクシーのお願いで、明日の八時、緯度35経度140のゴルフ場に九人分のタクシーをお願いします」

「わかりました。状況はどうですか」

「これなら、何とかなりそうです」

突然、無線の向こうが騒がしくなる。

「…え！そんなの！？スクランブル間に合う！？」

若い女性の人が急に慌てだした。

「こちら、館山統合司令所。緊急事態です。木更津に敵の大型輸送に三機が接近しているらしいです。スクランブルでは間に合いません。山を縫ってきたみたいなのでレーダーに写らなかったみたいですよ」

「これから、修羅場になりそうね……」

カノンが青くなった空を見つつ呟く。

6 とある統合司令所の若き指揮官の苦悩

「アンサズ」

「あと、三部隊に分かれましたから……はい、それだけです。オーバー」

無線交信は終了して、敵をこちらに來ると撃つということを、何回も繰り返している。

「切りがない」

「これなら、橋でも爆発したほうがよかったかも」

「たぶん、意味ないですよ。すぐに修復されると思うから」

それぞれが、M249から5・56x45mm NATO弾を撃ちだして、敵に命中させているが、数は一向に減らない。

さらに彼女たちには、もうすぐで敵の増援が来ると知らされているから時間の浪費を感じさせている。

「もうそろそろ、やばいかな……」

敵の数がさらに増えてきている。さらに、M249の弾薬も尽きかけて、後は一人100発ずつしか残っていなかった。

「退却します?」

「それが、ベストね」

二人が退却するために最後の弾薬を使い切る。銃弾の嵐がやむと、敵はなだれ込むようにして、こちらに来了。

「ハル! AT-4CSでハンヴィーを撃って」

「任せなさい。ハンヴィーを狙撃します」

シモハルが撃ちだしたAT-4CSの弾頭は、まっすぐ進みハンヴィーに当たる。

「後ろ向いて、逃げるわよ」

三人は、自分の武器を持って走り出す。後ろでは、轟音が響き渡り、橋が崩壊する音が響いたのだった。

その轟音と共に、ジェットエンジンの音が聞こえて、巨大な飛行機が、上空から来る。

「おでましね」

「みんな、無事だといいです」

「何とかなるでしょ」

三人は、そのまま料金を越えて、アクアラインの道路をそのまま南東に進んで行った。

「ソウイル」

住宅街を抜けて、田圃道に出る。そして、しゃがみながら周りを確認していると、上の方で、でかい音が聞こえる。

「あれは、輸送機」

「……たぶん：An-124が2……An-225が1……」

「これは、大部隊ね」

そして、An-124から、白いパラシュートが見え始めた。青空が、白い空へと変わり始めた。

「急がないとまずい」

「そうですわね」

「……い」

三人は、田圃道を東に突っ走り、住宅街に行き、息をひそめた。

くティワズく

ジェットエンジンの音が響く。

「いやな予感がするのだが……」

「あたりみたい」

「上を見た方がいいですね」

上を見てみると、パラシュートを開かして降下している兵がたくさんいた。

「あれ……何人ぐらいだ？」

「たぶん……300人は、越えてますね」

「次から次へと、来すぎだろう」

「明日までに、着くかな……」

「心配せずに進んで行こう」

三人は、87号線を南下していった。

「館山統合司令所」

「まずい状況になってちゃった……」

レーダーを見ながら一言。

茶髪のロングの女性　マユミが固まっていた

今、九人が約500人程度に囲まれているという最悪の状況が出来ていた。

そこに、風格のある女性が入ってくる。

「緊急事態だつて」

三十代前半ぐらいの人で、黒髪のショートの人だった。

「はい… ヨウコさん！ どうすれば!？」

「はい、はい、まずは落ち着いて……… まったく巻き込まれたから最悪よ」

ヨウコと呼ばれている人は、一周年記念のゲストとして呼ばれた現役の士官だ。他にも数名が呼ばれて巻き込まれている。

「状況は、どうなっているの？」

「今、クラン“月下の灯”の九人が空挺部隊2、3個中隊に囲まれているんです」

一個中隊、だいたい200人規模。

「それは、絶望的ね」

「どうすれば、いいと思いますか!？」

「それなら、自分で考えないと」

「それは、そうですが……」

「どうするの？ たぶん救出部隊を送れば、少なからず損害は出る。だから、九人を見殺しにして、ここにいる人を救うのか、九人を救うために、ここにいる人たちを危険にさらすのか。どっちか考えなさい」

「何で……私がこんなことを……」

「だって、私はあくまでオブザーバーだから、あなたがこの指揮権を持っているのよ」

ヨウコの言う通りで、館山統合司令所の指揮権は、全てマユミが持っていた。その指揮権で、他のクランに任務として命令することもできる。そのためにすごく悩んでいた。彼女は、士官のための勉強なんて一切していない、今回のバイトも意外に高額だったために何となく受けただけだった。マユミは、アナウンサー志望でそのために、ちょうどいい練習になると考えていただけだった。

「どうすれば……」

「悩んでいる時間がもったいない。今、もしかしたら戦っているかもしれない。あなたの一秒の悩みが、戦場においては、とても大きな意味を持つ」

「それじゃあ、かつこよく全軍で救出！！　って言っても納得してくれるんですか！！！！？」

マユミが絶叫するかのごとく半場、やけくそに言った。

「あら、それでもいいじゃない。そうしなさいよ、たぶん賛同してくれるわ」

「本当にいいんですね！？　私、アナウンスしちゃいますよ！？　ボタン押して叫ぶだけなんですから！？」

息が上がっていて、早口で一氣にいう。

「あら、」自由」

「わかりました。後悔しないでくださいね」

マイクを持って、スイッチをオンにする。

「これから、緊急任務があります。クランの責任者は、作戦室まで至急来てください！！」

大声で叫んだ後に、スイッチをオフにする。

「あら、あなた意外に軍人に向いているかも」

にやけた笑いをする。

マユミは、今になって散々後悔をした。

7 進まない時間……進んでほしい時間（前書き）

テイワズ

1・雅一

2・カエデ

3・シマリ

ソウイル

1・アヤネ

2・ヒメ

3・キリ

アンサズ

1・カノン

2・シノミ

3・シモハル

7 進まない時間……進んでほしい時間

「アンサズ」

今は、道路を下りて、セメントを使っていない、砂利道を歩いていた。

道路の下を歩いているだけだ。アクアライン連絡道は、いい感じに目くらましになっていた。しかしその状況も、どれくらい、いられるか分からなかった。すでに白い空から、青空へと変わりつつあった。

「敵は？」

「……いません」

「行くわよ」

少しずつ進む。非常にゆっくりだが、敵に見つからないように息をひそめて、ゆっくりと進む。

「全員、ヘッドホンを付けて」

片耳だけつけるヘッドホンを装着する。

「こちら、アンサズ1。どう？」

「アンサズ2、感度良好です」

「アンサズ3、同じく」

近くにいるはずなのに、確認する。いざという時のためには、大事な心がけだ。

この無線は、至近距離しか通話ができない。数百メートル離れると、通信不能になってしまう。

「アンサズ3、南の方向に敵が集まってる」

「アンサズ1、確認。気づかれないようにそっと」

「アンサズ2、了解」

「アンサズ3、ラジャー」

三人は、気づかれないように、そっと行く。敵は、5名で200m辺りに集まっている。普通なら簡単に倒せるのだが、場所を気付かれるとまずいので、足音を立てずに行く。

そして、何とか相手が見えないところまで、行くことに成功した。

「何とか、いけましたね」

ものすごく小さな声でしゃべりかける。

「そうね……」

三人は、住宅の塀を背にして、進んで行った。

時刻は、ようやく9時を回ったところだった。

「館山統合司令部」

画面がたくさんあり、真ん中には木更津の航空写真が映し出されている部屋に数十名が集まる。

「みなさん、こんにちはマユミです。ここの指揮権をなぜだが、私がつっています。それで、皆さんに今から、クラン救出作戦を実行してほしいのです」

画面に映し出されたのは、三機の輸送機の内、二機が空挺部隊を出して、もう一機が滑走路に着陸しているところだった。

「なるほど……敵の規模は、だいたい500人程度で、戦車が5両ぐらいですね」

若い男の人が最初に口を開いた。

「結構きびしいわね。それで、クランの人数は？」

「9人です」

「9人ね……」

全員が、考え込む。この戦力差で戦いを挑むのはかなりきつい。

「NPCを使うのはどうですか？」

「それは、信頼できない。NPCだと味方認識していない人には平気で撃つから、救出任務には向いていない。だから、プレイヤーで行かないといけないけど……」

「一応、明日の8時にゴルフ場で、ヘリを要請しているんですけど……」

「その任務は、俺たちがやることになっている」

ガタイのいいオヤツさんらしい人が、手を挙げて言った。

「先ほどから、横に立っているオブザーバー様は、どうすればよろしいと思いますか？」

あるクランリーダーが、横に突っ立っているヨウコに質問を投げかける。

「貴方たちが考えないと、でも、これはゲームじゃない。一人、一人に命がかかっている。それをどうするのは、貴方たちで考えないと、死ぬのかどうするのか」

「はははっ！！ あんたとは、気が合いそうだ！！」

今まで黙っていた。威勢のよく、体つきがいい女の人がかい声で笑う。

「チキンどもは、小屋で怯えとけばいいんだよ。そう思うだろ！？
オブザーバー殿」

「そうね、チキンはチキンらしく、しといたほうがいいわね」

「二人とも、静かにしてください。話が進まないじゃないですか！
？」

マユミが二人を止めに入る。他の人は、それをボーと眺めているだけだった。

そして、先ほどのガタイのいい男の人が口を開いて、

「俺は、救出作戦に賛成だ」

周りが騒然とする。「あの、鶴亀運送が」「それなら……」

鶴亀運送というクランは、ヘリや輸送機による人員輸送を主目的としている全国区のクランだ。

「私たち“フラワーリング”も協力するわ」

「それなら、私たちの“ヴァルキュリアドラグーン”も作戦に参加します」

続いて、二人の女性が立ち上がり賛同する。

「それなら、俺も……」

「……いいかな」

やがて、様々な人が賛同する。

「やれやれ、世話のかかる奴らだね」

「まったくだ」

ヨウコともう一人の女性が頷きあう。

「私が考えた作戦を言ってもいいでしょうか？」

マユミが物腰が弱弱しく、怯えたように震えた声で話す。

「それでは、指揮官殿の話をきこうじゃないか」

「私が考えた作戦は、敵がエアボーンしてきたなら、こっちはヘリボーンで行きたいと思います。救出する人数は、9人。それぞれ3人ずつに分かれているそうです。それぞれ、ヘリを回して救出に行きます。まずは、偵察及び制空権の奪取。その後、戦闘ヘリと、爆撃機による空襲。そして、ヘリによる強襲をしたのちに、救出します。」

大きな画面の中で、シミュレーションしながら部隊が動いている。

「……あの……どうでしょうか??」

おそろおそろと言った感じで尋ねる。

「特にダメな点は、ないね。三段構えの戦略もなかなかいいと思う」
ヨウコが賛同すると、周りの全員が了承する。

「それでは、今から1時間後に作戦の第一段階を開始させます。作戦名は、“The sunrise to rescue”。作戦の詳細は、追って説明していきます」

「イエス、マム！！！！」×作戦室にいる全員

全員がふざけた感じで敬礼して作戦室を出ていく。

「なかなか、様になってたじゃない。あなた、もしかして戦争映画とか好き？」

最後にヨウコとマユミだけになり、質問をするとマユミの顔が赤くなり

「少しだけです。少しだけ」

「ふうん、そうしといてあげるわ」

二人は、さらに作戦を考えていく。

「あと、一時間、頑張ってくださいね」

マユミは、心の底から願った。

7 進まない時間……進んでほしい時間（後書き）

感想、評価などお願いします。

8 狙撃の銃声音による開戦（前書き）

テイワズ

1・雅一

2・カエデ

3・シマリ

ソウイル

1・アヤネ

2・ヒメ

3・キリ

アンサズ

1・カノン

2・シノミ

3・シモハル

8 狙撃の銃声音による開戦

「テイワズ」

三人が慎重に歩いていると、南西の方に、とてもでかい輸送機が着陸する。

「おいおい、あれなんだ？」

雅一が、二人に聞くとシマリから返答が返ってくる。

「あれは、An-225。世界最大の搭載量を誇っている輸送機です。数々のギネス記録を作ってますね」

「まてよ……あれに何が積まれていると思う？」

「たぶん、戦車が4、5両は搭載できるかと……」

「まじでか、走るぞ」

「焦らず、ゆっくり、ゆっくり」

カエデが、どうどう、と言いつつ雅一をいさめる。

「けど、橋は早く渡ったほうがいいと思いますよ」

「そつだ、そつだ」

「う、ううう、わかった、わかった」

三人は、急いで橋を渡る。

「南に行くと、あの輸送機のある場所に行くから、このまま南東に進んで行きましょう」

「そうだな」

「いきましょう」

三人が、南東に進路を変える。周りに遮蔽物のない、田園地帯は、しゃがみながら走って行く。

「腰がいたい……」

「シッ！ 静かに！」

シマリが、雅一に注意したのちに、北東の方に指をさす。三人は、田んぼの横にある用水路の中に入る。

「敵が、三人。どうする？」

「狙撃してもいいけど、そうすると他の敵まで場所がしられちゃう」

「それなら、無視していこうぜ」

「行けたら、苦労しないですよ」

「そうそう」

用水路の狭い通路の中で、男一人と女二人という変わった状況にいる。

「それなら、狙撃してから考えようぜ」

「それじゃあ、答えになってないし」

「そうです」

「狙撃、狙撃」

雅一が、カエデに視線を送る。

「わかったから、撃つてから考えましょ。敵の陽動に使えるし」

カエデが、M21を準備する。そして、大きめのサイズの片目専用スコープをシマリに渡す。

「シマリ、観測手。よろしく」

「了解」

カエデが、M21のスコープを覗く。シマリもスコープを覗きこむ。観測手の役割は、撃っている間の敵の監視と、周りの状況を見るために必要なのだ。

「敵の距離は、350。数は、3」

「他に敵は、見当たりません」

軍服の男は、AKI47を持って、突っ立っている。いい的だった。

「一番右の奴から」

「了解」

カエデが、M21の引き金を引く。M21の銃口から、7・62x51mm NATO弾が吐き出されて激しい騒音と共に、一人が倒れる。

「命中」

「もうひとり行くよ」

二人は、慌ててAKI47を構えたが、敵がどこから撃っているのか、わからずに慌てている。

M21が激しい悲鳴を上げる。

「外した」

敵の肩をかすっただけだった。カエデが、また狙いをつける。

「敵は、右に移動中」

「まかせといて」

M21がさらに音をならす。

「命中」

「最後の一人」

雅一が唾を延びこむと同時に、銃撃音が鳴り、カエデがガッツポーズをする。

「命中。早く逃げましょう」

「マサ、退散するよ」

「了解」

三人は、南へと足を進める。

小さな住宅街を抜けて、進もうとしたのだが、一発の銃弾が窓を吹き飛ばす。

「どこ！？」

「たぶん、あの学校の屋上」

三人は、学校の死角となる場所に隠れる。こそつと盗み見る。

「屋上に、動く影が4つ。たぶん、狙撃主と観測手ね」

「距離は、300。ここから先は、遮蔽物がなしだから、ここから反撃しないと」

カエデが瞬時に状況判断をする。

「それなら、俺が囷になるから、カエデとシマリで狙撃してくれ」

「大丈夫!？」

カエデが心配そうな顔をする。

「大丈夫だって、前にも言っただろ、俺はRPGのスキルが使えるんだから」

「それなら……無線のコールサイン覚えてる？」

「もちろん」

「それなら、私とシマリがその家の二階から狙撃するから、準備が整ったら、合図を送るわ」

カエデが玄関をぶち破って中に入る。そして、階段を上り、二階の窓の隙間を少しだけ開けてM21を構える。

「こちら、ティワズ3。ティワズ1、準備いいわよ」

「ティワズ1、期待してるぞ」

シマリが四人の位置を見て伝える。

「屋上の右上に二人」

「了解、ティワズ1 GOGO」

「了解」

雅一が、塀から飛び出して田んぼの方へ走って行く。

「スキル、疾風」

雅一の走る速さが、さらに速くなり敵をかく乱する。

「一人目、もらい！」

M21の銃声が響く。

「狙撃主に命中、観測手は逃げて行きます」

「逃がすか！」

すぐに狙いをつけて撃つ。

「肩に命中、しかし倒せていません」

「まだまだ」

そのまま、4発連続に撃つ。その内3発が敵の胴体を貫き倒れる。

「観測手、ダウン。他の四人は……」

雅一は、その間に小さな土手の裏側にうつぶせになる。

「死ぬかと思っただけ」

家の窓が割れる。

「敵は？」

「一階部分です」

もう一発が、屋根に当たる。距離が近くなっている。

「当たれー！」

M21の引き金を引き、当たると同時に敵も引き金を引き、斜め上に当たる。

「間一髪」

「もう一人も逃がさない」

M21を連続して数発撃って、弾切れになる。

「命中、敵全滅」

「こちら、テイワズ3。オールクリア」

「テイワズ1、了解。これから学校に行くから、来てくれ」

「テイワズ3、すぐにいくわ」

「テイワズ2、了解です」

M21をしまい、家を出ていく。

ようやく、9時を過ぎたあたりだった。

9 静寂と喧噪の戦い方（前書き）

テイワズ

1・雅一

2・カエデ

3・シマリ

ソウイル

1・アヤネ

2・ヒメ

3・キリ

アンサズ

1・カノン

2・シノミ

3・シモハル

9 静寂と喧噪の戦い方

「ソウイル」

敵に遭遇しないように、警戒を強めて前進していた。

住宅街を抜けようとしたのだ、小さな住宅街と住宅街の間は、田んぼが広がっており、ちょうど武装した4人が、その場所を見張っていた。

「邪魔ね……」

アヤネとキリとヒメは、敵から50mぐらい離れた民家の中に入っていた。

「……私が2……アヤネが2……」

「わかった。それじゃあ、もう少し先の所から撃つから、キリはよろしく。ヒメは、付いて来て」

「わかりましたわ」

「……了解」

キリは、足音ひとつ立てずに、外に出ていく。アヤネとヒメは、このまま外に出て、相手との距離を詰めていく。
アヤネがSG552のセーフティーを解除して、照準器で一人の頭に狙いをつける。

SG552とは、スイスが使っているアサルトライフルで、命中率の高さが売りの銃だ。

キリは、その間に家の裏を通って、相手に近づく。

家と家の間のわずか10mに4人がいる。1人は、塀にもたれ掛つており、3人は周りを見渡している。2人はAK 47。1人が、SVD、1人がRPGを持っている。

SVDは、ドラグノフ狙撃銃。ソ連が採用した狙撃銃で、耐久性とセミオートのために連射できるという特性を持っている。

キリは、もたれ掛っている男の塀の裏側に着く。

「ソウイル3 OK」

小さな声でつぶやく。

「いまよ」

アヤネがイヤホンで合図を送る。

キリが塀の上に登って、ピアノ線らしき紐^{ひも}で、相手の首を絞めてそのまま殺す。

アヤネが、SG552の弾を三発撃ちだすと、その内、一発が男の頭に当たる。

二人が慌てて、アヤネの方を見る。キリの存在は、気づいていなかった。

キリは懷から、ベレッタ M92 エリートIA サイレンサー装備を取り出して、1人の男の眉間に銃を突き付けて撃つ。乾いた音と共に、弾が貫通して男が倒れる。

アヤネも接近していき、フルオートでSSG552をぶっ放す。何十発が当たり、倒れる。

あっという間に四人を倒すことに成功した。

ベレッタ M92 エリートIA サイレンサー装備 は、M9として、米軍が採用している拳銃の事で、エリートIAは、さらに耐久性や、精度をよくした拳銃となっている。セミオートで銃弾の数も多い。サイレンサー装備のために銃声が激減している。

「殲滅終了。キリ、ご苦労様」

「……当然」

「二人ともすごいですわ」

ヒメが二人の所に走って行く。

「ありがと。それじゃあ、駆け足で田んぼ道を踏破するわよ」

「……了解」

「はいですの」

3人は、次の住宅街へと息をひそめる。

「ティワズ」

「部隊を分けたのは、失敗ね」

カノンは、激しく後悔している。

「今更だよ」

「今を考えないと」

状況は、最悪だった。武装した兵16人に囲まれていた。敵は、こちらに気付いていないようだが、完璧に囲まれていた。そして、3人は家の間に縮こまっていた。

「どうする？」

「それなら、家に入って窓から応戦してみる？」

1人が入れそうな窓を指さす。

「それでいいかな」

窓をそつと開けて中に入る。風呂場につながっていた。

「完璧な不法侵入ね」

「ヴァーチャルだから、大丈夫ですよ」

続いてシノミが入り、最後にシモハルが入る。

「二階から、狙撃と銃撃を加える。最初にどれぐらい減らせるかが肝よ」

3人は、2階に上がり、窓から敵を覗く。

敵は、16人。車が2台分ぐらい通れる道に固まって歩いている。綺麗な2列の隊列となっている。

「まず、銃弾の嵐を浴びせましょうか」

カノンがMK48 Mod0を構える。

MK48 Mod0は、M249の7.62x51mm仕様で、少数対多数の戦いにおいて、威力を補えるように、弾を大きめのサイズを使っている。

シモハルは、M24のスコープを覗く。

シノミは、G36Cのセーフティレバーを解除して窓の隙間から、銃口をだす。

G36Dは、ドイツ軍が使っているアサルトライフルで、耐久性などが優れていて、汎用性に富んでいる。

敵が家の真横を通ると同時にカノンが口を開き

「銃撃開始」

G36Dの弾が、飛んでいき2人に当たり、1人は絶命、1人は倒れる。カノンのMK48 Mod0は、窓をぶち破って銃弾をまき散らす。狙って撃っているのではなく。ただ左右に移動させながら撃っている。それによって、数人が巻き込まれる。シモハルのM24は、正確に1人1人の胴体を狙って撃っている。

敵も反撃してきて、AK-47が、窓を割ったり木の板を穴をあけている。

3、4人が家の中に突入してくる。

カノンは、弾切れのMK48 Mod0を横において、UZIを持って、階段を一気に飛び降りて3人の胴体に穴をあける。

UZIは、サブマシンガンで、命中率は低いが、連射力が優れているバラムキ専門の銃だ。

カノンが、また2階に登っている間にシノミがG36Cで援護をする。

敵が全員、家の中に押しかけてくる。

シモハルもM21を横において、M1014を取り出して、壁越しで散弾が飛び、貫通して敵をハチの巣状態にする。

M1014は、ボルトアクションのショットガンで、信頼性と威力においては優れている。

シモハルは、壁越しに何発も撃ち、弾切れと共に一発ずつ弾を込めていく。

シノミも、G36Dで応戦しながら、隣の部屋をぶち破って、奇襲する。

「どうだ！」

その銃弾の嵐に敵が倒れていく。

「みんな、窓から出て！！」

カノンがM67破片手榴弾を3個ほど投げ込んで、窓を出て屋根を滑って、庭で出てから塀を越え外に出る。

シノミとシモハルも同じように出ていく。もちろん武器は、しっかりと手に持っている。

そして、爆発と共に、手榴弾の破片が、壁という、壁を貫通していき、家の中にいる敵兵を食っていく。

3人は、間一髪で外に出ていき、東へと急いだ。

10 ピンチをチャンスにしての反撃（前書き）

テイワズ

1・雅一

2・カエデ

3・シマリ

ソウイル

1・アヤネ

2・ヒメ

3・キリ

アンサズ

1・カノン

2・シノミ

3・シモハル

10 ピンチをチャンスにしての反撃

くティワズく

雅一たちは、学校へと着き東に進んで行こうとした。

校庭を渡って向かい側に向かおうとしたときに、轟音と共に、校舎の一部が吹っ飛んだ。そして、瓦礫^{がれき}がこちらに襲い掛かって来る。

「危ない！」

何とか当たらずに済んだ。

「何だ？」

「たぶん、戦車。南西の方から撃ってきてる」

カエデが校舎の破損具合から推測する。

「おいおい、俺たちの場所が敵に知られてるのかよ」

「屋上にいた奴の誰かが、連絡したのかも」

「どうするんだよ！？」

「走って、隣の倉庫に行くよ！」

3人は、フェンスを飛び越えて、倉庫へと走って行き、息をひそめる。

戦車の移動する音が近くなってきた。道路や、瓦礫^{がれき}などの障害物を関係なしに來ている。キャタピラの音が、とても不気味に聞こえる。

そして、少しずつ離れて行った。

「大丈夫……だよな……」

「たぶん」

3人が、ほっと一安心すると、轟音がして、地面が揺れる。

「うわぁー!!」

「隣の倉庫が撃たれた!」

「まじでか、ここもやばいだろ」

「逃げましょう」

「賛成」

3人は倉庫の壁を爆破して、裏側から出ていく。その内に今いた倉庫も破壊される。

「ギリギリセーフ」

「まだ、セーフじゃない」

道路には、さらに戦車が回り込んでいた。

「囲まれた」

「どうするんだよ」

「しずかに！ まだばれていないと思いますから。ちなみにあの戦車は、T-90です。ソ連の最新の戦車です」

シマリが雅一の口を閉じさせる。

「対戦車兵器はないのかよ」

次に、3階建ての建物に入って隠れる。戦車の他にも、数十人の武装して軍服を着た兵がT-90の周りにへばりついている。

「最悪の状況」

「悪あがきでもしてみるか？」

「バカですか？ 戦車相手に勝てるはずないですよ」

T-90は、2両。東に1と、南に1だった。

「それなら、奪って見るか？ 戦車？ シマリ戦車は扱えるか？」

「はい、扱えますけど、どうやって奪うんですか？」

「倉庫を撃ってるやつを奪う事なら、たぶん出来るぞ」

「本当ですか??」

懐疑的な視線を見せる。

「大丈夫なの??」

カエデまでもが懐疑的な視線で見てる。

「大丈夫だって」

「それなら、行って来い!!」

カエデがGOサインが出る。

「随分軽いな」

「死亡フラグ立てた方が良かった?」

「いいわけないだろ!」

2人は、こんな絶望的な状況の中で笑顔を見せた。

「わかりました。戦車を奪ってください。その後は私が操ってみますから」

シマリも同意する。

「それなら、移動開始だな」

3人は移動をし始めて戦車の裏側に来る。

T-90の乗員は、3人。そして上にRPDを構えている兵が一人いた。

「カエデは、あの上にいる奴をよろしく。シマリ、一緒に行くぞ！」

「了解です」

「は〜い」

T-90が角を曲がろうとした時に、カエデのM21が火を噴き、RPDを構えていた兵が倒れる。

それと同時に雅一とシマリが走って行きT-90の上に登り、シマリが開閉口を開ける。

それと同時にシマリがスタングレネードを投げ込み、また閉じる。激しい音と光が漏れていて、次に雅一がMP7を持って中に入り2人殺す。そして、シマリがMAC-11で1人を殺す。

MP7は、サブマシンガンで、弾薬が貫通性のいいのを使っている。閉所戦においては、優秀な銃だ。

MAC-11は、アメリカのサブマシンガンで、連射力がよいが命中率が極端に悪い。サイズが小さいために隠し持って行動できる。さらに20世紀後半において、アメリカのCIAがよく持っていたために、CIAのおもちゃとも言われている。

「カエデ！ 乗れ！」

中に倒れた3人を外に出す。そして、一定時間が経過すると血痕が

消えてなくなる。

「私が運転します。なので、カエデは砲手を、マサは上で機銃をお願いします」

「あれ？ 2人だけで操縦できるのか？」

「一応は、MCDに車長と操縦主と一緒にできるツールを作ってもらいましたから」

「誰にだ？」

「アヤネさんです。あの人、プログラミング系はすごい技術を持っているんですから」

「アヤネが……」

アヤネの特技がプログラミングと言うことに驚いた雅一だった。シマリが、MCDを出して何やら設定をしてまた腰の所に戻す。

『敵周辺に戦車1 敵兵数多数 東北東に固まっている模様』

シマリのMCDから無機質な声がする。

「これは？」

「これは、車長の代わりをするAI。AIが周りの敵情報や、味方の確認なんかを瞬時に行って、操縦主と砲手に伝えるんです。最近の戦車には一般化されてきたけど、この時代じゃないからって、アヤネさんが勝手に作ったんです」

「アヤネって、すごいな……」

「さて、反撃開始します!」

シマリが叫ぶ。

「君のハートにドッカーン!!」

カエデがふざけた感じで反応する。

T-90は、そのまま敵の居る所へと奇襲する。

『敵前方に戦車1、左右に武器を所持した人が多数』

敵のT-90の砲塔とは、逆側から出て行ったために、すぐに対応できず。

「沈め!!」

カエデが狙いをつけて、そのままT-90の後ろ側に直撃して大破。さらに、その破片などで周りの兵も巻き込まれる。

『戦車沈黙。武装兵、残存数14』

T-90を前に進めて、雅一が上から、RPKをばら撒く。そして、砲塔の横についている機関砲に攻撃と、125?榴弾を撃ち破片が散らばり敵が倒れていく。

敵もやけくそで、AK-47を撃ってきているが、戦車の装甲の前に跳ね返っているだけだった。

歩兵との戦闘は、あっという間に終わり。周りに敵はいなくなる。

『残存ゼロ。周辺に敵はいません』

「それじゃあ、戦車でドライブと行きますか」

T-90を動かして、東へと急いだ。

10 ピンチをチャンスにしての反撃（後書き）

誤字脱字、感想、評価などお願いします。

11 ファーストフェイズの開始と偵察

〔館山統合司令部〕

「ここは、大胆に爆撃して、かく乱したのち……でも、うん。難しい」

マユミは、木更津の拡大地図を眺めながら唸っている。

「気を張らずに偵察が帰って来てからでも遅くないって」

ヨウコが作戦室に入って来て、気を張っているマユミに声をかける。

「でも、ある程度は決めておかないと」

「もう決めてあるじゃない。偵察、制空権確保、爆撃、ヘリボーン、救出。完璧じゃない」

「でも……もしもっていうために、パターンは考えないと」

「頭を柔らかくして考えてみるんだ。一つの事を見すぎるな。たぶん、あなたは救出する事だけ見てるから、迷っている。だから、もっと広く考えればいい。木更津にいる敵兵力の排除だけを考えればいい」

ヨウコがマユミの肩に手を置き叩く。

「広く…ですか……」

「司令官は、木を見すぎたらダメ。森を見ないと！ 木を見て森を見ずじゃ司令官失格よ」

「森……森…森、森を使いましょう！」

マユミがひらめいた感じで作戦室の大きな画面を操作していく。

「ヨウコさん、館山にスナイパーってどれぐらいいますか？」

「そうだね……数十人はいるんじゃないか？」

「ヨウコさんは、狙撃はできますか？」

「もちろんさ、私の射撃の腕は結構いいよ」

「それなら、今からスナイパーの人を招集するので、その部隊長をやってくれませんか？」

「でも私は、オブザーバーだから……」

「関係ないですよ！ お願いします！」

マユミの目に水がたまって行き、決壊しそうだった。それに負けたヨウコが仕方ない感じに頷く。

「わかった。やる、部隊長ぐらい、やってやるよ」

「ありがとうございます。さっそく、招集しないと」

マユミは走って作戦室を出ていく。

「元気だね……」

ヨウコも作戦室から出て、武器の確認をするのだった。

「マイク、テス、テス。緊急ですが、狙撃に自信のある方は至急作戦室に来てください。編成上、必要場合はクランを優先させてください！ もう一度言います。狙撃に自信のある方は至急作戦室に来てください。編成上、必要場合はクランを優先させてください！ 通信終了」

アナウンスのスイッチをオンにすると、今度は別の無線から応答があった。

「はい、なんですか？」

『こちら、偵察部隊担当の“コンバットエンジェル”だが、離陸許可をくれ』

コンバットエンジェルは、空戦専門の全国区のクランだ。

「了解、こちらのコールサインは、ビーナスシルク。」

『ウィルコ。こちらのコールサインはエンジェルだ。そして、偵察機がランドシャッターだ。十二機上がるぞ！』

「こちらビーナスシルク。了解、離陸を許可します。あと、ファーストフェイズを開始します」

「コンバットエンジェル」

「こちら、ビーナスシルク。了解、離陸を許可します。あと、ファーストフェイズを開始します」

「よし、各機聞いたか？ まずはエンジェル5、6、7、8が上がれ。その次にランドシャッターが1、2、3、4が上がって、最後にエンジェル1、2、3、4、が上がる」

「了解」×11

「エンジェル5、離陸」

「エンジェル6、離陸」

エンジェルと呼ばれている人たちが使っている機体は、F-2だ。

F-2は、F-16をもとに作り、機動性能が上がっている。さらに突出しているのが、対艦ミサイルを四発搭載できることだ。

「ランドシャッター1、出撃」

その後、RF-15Jが飛んでいく。

RF-15は、F-15の偵察用の機体だ。この機体には、カメラ

などが搭載されていて、自衛用としては、短距離ミサイルが二発とバルカンが搭載されている。

「最後にエンジェル1 離陸」

『健闘を祈ります。それでは、偵察活動に入ってください』

そのまま、上空を越えて雲の上に行き一気に木更津上空まで到着する。

「エンジェル3、隊長、でか物を落としませんか？」

滑走路に止まっている。An-225の事だ。

「エンジェル1、許可する。3、4行って来い。跡形もなく消し去れ。その他は、編隊を崩すな！」

RF-15J1機につきF-2が3機守っている編成となっている。

「エンジェル3、フォックス・ツー」

F-2に踏査されているAAM-5が2発放たれる。

「エンジェル4、フォックス・ツー」

同じく、AAM-5が2発放たれて、そのままAn-225の巨体に命中する。2発が両翼に当たり折れる。さらに2発が先端部分とど真ん中に当たり。爆発はしないけど炎上している。

「エンジェル3、丸焼きにしました」

「エンジェル3、4 ご苦勞。ランドシャッター状況はどうだ？」

「こちら、ランドシャッター1。敵はきれいに3つに分かれています。さらに一番西にいる部隊は、戦車が4両となっています。南東に向かって移動している模様」

「救出者の姿は、見えるか？」

「いえ、視認できません。やはり行って見ないことにはわかりません」

「ランドシャッターご苦勞」

「こちら、エンジェル1。ビーナスシルク応答してください」

「こちら、ビーナスシルク。どうぞ」

「やはり、3つに部隊がわかれており、南東に向かって移動しています。我々は、一応滑走路に止まっていた輸送機を撃破しました。もう少し、偵察を続けます」

『ビーナスシルク 了解。燃料切れたらすぐに戻ってきてください』

「エンジェル1 了解」

「館山統合司令部」

「やっぱり……この作戦通り行きましょ」

ヨウコにレポート用紙を渡す。

「これで、いいんじゃない？」

「それなら、今から20分後に第二フェイズに移行します」

マユミは自信ありげな顔していた。

「それじゃあ、私は行ってくるよ」

「気を付けて」

「死なないから心配しなさんな。今回の任務は簡単さ！」

ヨウコは余裕そうな顔で走って司令部を出て行った。

「私も頑張らないと」

自分自身にカツを入れた。

12 ラッキースモークと救出準備（前書き）

テイワズ

1・雅一

2・カエデ

3・シマリ

ソウイル

1・アヤネ

2・ヒメ

3・キリ

アンサズ

1・カノン

2・シノミ

3・シモハル

12 ラッキースモークと救出準備

「アンサズ」

「カノン！ あれ！！」

シモハルが上空を飛ぶ、飛行機を指さす。

「たぶん、味方ね」

「でもなんで？」

戦闘機は、上空を何回も飛行していた。

「たぶん、偵察だと思います？」

「なんで？ 偵察？？」

「もしかしたら、館山からの救援かもしれない」

3人は学校の校舎の中にいた。

それまでに散発的な戦闘は続いたのだが、1人や2人といった小規模だったために敵にはならなかった。

「それなら、校庭にスモークグレネードでも投げてみる？」

「それいいね」

「でも、それだと敵にはれませんか？」

シノミが的確に指摘する。

「ここで、持ちこたえれば大丈夫」

「カノンがそういうなら……」

「さっそく作戦開始」

カエデが校舎の3階部分から、校庭に向かってスモークグレネードを1個投げる。

校庭が緑色に包まれる。

くソウイルく

「キリ、あれ何？」

アヤネが雲の少し下らへんを飛んでいる戦闘機を見て言う。

「…F - 15とF - 2……」

「それなら、味方ね」

「何で味方とわかるのですの？」

「それは、F - 15とF - 2は米軍の機体で、相手の正規軍は入手が困難だからよ」

「あれは味方ですね」

「……そう」

3人は橋を渡り住宅街に入ったところで飛行機を見たのだ。

「何しに来たのですか？」

「さあ……？」

アヤネが首を横に振る。

「わかりましたわ！ 助けに来てくださいましたの。きっとそうですわ」

「助けにね」

アヤネが空を見て、上空を旋回する飛行機を不自然に思う。

「それも、ありえるかもね」

「……それなら……あそこ」

キリは、少し行ったところにある野球場を指さす。

「あそこなら、敵の襲撃を受けても防げるし、いいね」

アヤネが頷く。

「なんですの!？」

ヒメだけが良く分かっていなかった。

「野球場で、スモークグレネードを投げて、目印を作るの」

「目印。なるほどわかりましたわ」

ヒメが納得したような顔をしたのだが、少しわかっていないようだ。

「まあ、野球場まで行きましょう」

「了解ですの」

「…了解」

3人は、戦闘を起こさずに野球場に駆け込む。

そして、野球場のスタンドのピッチャーが投げる所にスモークグレネードを投げる。

赤色の煙が上空にあがる。

くティワズく

『上空に機影、数12』

「マサ！ 上空見て！」

シノミに言われた後に、雅一は上空を見る。

「そうだな……たしかに戦闘機がこちら辺を旋回しているの見える」

「機種は？」

「分かる筈ないだろ！」

「私が見る」

カエデが上に登ってくるのだが、上部開閉口から戦車の砲塔部分から戦闘機を眺める。

「たぶん……F - 16かF - 2で、F - 15もいるわね」

「それなら、味方なんでしょうね」

「ラッキーだな。助かるぞ！」

「いったい何を根拠に？」

「勘だ！！」

雅一が、親指をぐつと伸ばして決めポーズをする。

「勘って……」

「いいんじゃない、かけてみましょう」

カエデがシノミに向かって言う。

「それなら、スモークグレネードでも投げて救援要請しましょう。あと、この戦車をかくさない」と

「何でだ？」

「敵の戦車だから、間違って攻撃されたらたまったもんじゃないわ」

「そりゃ、そうか」

「それじゃあ、あそこの広い駐車場をポイントにするわよ」

戦車は、南西あった広い駐車場に入って行き、建物に突っ込む。窓が一斉に割れる。中にいい感じに入る。

「パチンコ屋か」

「ここに簡易防衛陣地を作らないと」

「スモーク投げました！」

黄色の煙が駐車場に漂った。

「コンバットエンジェル」

「こちら、ランドシャッター1 緑色の煙を確認」

「こちらもです。赤色の煙を確認」

「こっちでは、緑色です」

RF-15Jからの報告があり、下を見ると、煙が出ている。

「エンジェル1より、各機へどう思っ？」

「三つ上がってるので、味方だとは思いますが……」

「ビーナスシルク 応答してくれ」

「こちら、ビーナスシルク どうしましたか？」

「黄、赤、緑の煙が上がっているのだが、どう思っ？」

「それは……味方じゃないですか？ その場所を記録してください。そこに、ヘリを送りましょう」

「こちら、エンジェル1了解。 ランドシャッター各機、場所の測定を頼む」

「了解」×4

『作戦の爆撃をカットして、救出部隊を送ります。偵察部隊は帰還してください』

「こちら、エンジェル1 了解 全機聞いたな！ 帰還するぞ！」

「ラジャー」×11

〈館山統合司令部〉

マユミは、コンバットエンジェルからの報告を聞いて、作戦を立て直す。今回の作戦はうまくいくかもしれないと、嬉しくなった。

「こちら、統合司令部です。 今、救出するクランから、煙が上がって、場所の特定ができました。なので、爆撃は中止で、そのまま救出作戦を実行します。救出部隊は、至急準備に取り掛かってください！」

こうして、救出作戦が開始された。

- 3 作戦開始と不可視迷彩（前書き）

テイワズ

1・雅一

2・カエデ

3・シマリ

ソウイル

1・アヤネ

2・ヒメ

3・キリ

アンサズ

1・カノン

2・シノミ

3・シモハル

- 3 作戦開始と不可視迷彩

〈館山統合司令部〉

あれから、10分後に準備を終える事が出来た。
みんな、うきうきしていて、早めに準備をしていたのだ。

『こちら、ヴァルクリアドラグーン。いつでもいけます』

『こちら、鶴亀運送、準備整いました』

「了解、鶴亀運送さんは、赤色と緑色のポイントに行ってください。
ヴァルクリアドラグーンさんは、黄色のポイントに行ってください。
い。コールサインは、ビーナスシルクをコールチェンジで、ミステイで」

『ヴァルクリアドラグーンは、ドラグーン』

『鶴亀運送は、タートルヘッドで』

「了解しました。ドラグーン、タートルヘッド。こ武運を」

『了解』

『安い、速い、安全がモットーですから』

UH - 60 が3機と、AH - 64 が3機、空中を舞う。

UH - 60 は、通称ブラックホーク。輸送ヘリとして大変便利なものとなっている。

AH - 60、通称アパッチ。攻撃ヘリとして、対地攻撃力も高く。防弾性能もよくなっている。

「着くまで、30分。持ちこたえてくださいよ」

『こちら、フラワーリング。制空任務の引き継ぎのために離陸します』

「了解」

『コールサインは、ハンターとコーラルです』

「わかりました」

F - 15E と F - 14D が空に飛んだ。

（ヴァルキュリアドラグーン）

ヴァルキュリアドラグーンは、名前の通り、女性のための騎兵隊だ。

現代の騎兵隊は、馬などを使わずに、ヘリなどを使ったヘリボーン
の事を指す。

UH-60の中には、完全武装した人が4人座っていた。

「何で、うちらだけヘリに兵隊を乗せてるんですか？」

突然、赤髪のポニーテールの女の子が愚痴る。

「何か、よくないことが起きそうなの」

黒髪のショートの小さな女の子が座り心地の悪いヘリの座席に座っている。

「隊長、でも、鶴亀運送は、誰もせていないんですよ！」

「それは、低コストで請け負うからよ。私たちは、高いけど質のいい安全にしないと」

この世界におけるクランは、民間軍事会社の役割をしている。自前で武器などを購入して、米軍の任務を受ける。まさしく、民間軍事会社のやることなのだ。

そのために、もちろん、各クランごとに、特徴も変わってくる。

ヴァルキュリアドラグーンは、奇襲から救出まで、迅速にやることを得意としている。

人数は、たったの13人。ヘリの操縦員が、2名なので、戦う人数は、11人なのだ。

「それでも……」

「任務は任務よ、でも、これはゲームじゃないんだから。いつも以上に気を引き締めて」

黒髪の女の子の発言に周りの人がつばを飲み込む。

「生き残るわよ!」

ヘリのローター音が鳴り響く中、ブラックホークは北へと急いだ。

くソウイルく

「まずいわね」

アヤネが観客席の所にしゃがみながら隠れている。

「どうするのですか?」

ヒメは、うつぶせになってアヤネに聞く。
敵が、煙を見ために集まってきている。
ざっと、20人程度だ。

敵も隠れながら、AK-47を撃ってきている。

アヤネも、撃ち返しているが、人数が少ないために火力負けしてしまっている。

「これでどうですの!-!」

ヒメが立ち上がって89式小銃を乱射する。

「ヒメ、あんたは寝ていなさい!」

キリとアヤネでヒメを屈ませる。

「ここは、ズルをしちゃいましょ」

アヤネがMCDを出して、何やらいじっている。

「はい、キリ。このツールを使って」

「……ありがとう」

アヤネがキリに渡した、ツールは、不可視迷彩。ようするに目に見えなくする事が出来るツールだ。

「制限時間は、3分。それまでが、限界。MCDの処理能力の限界でもあるんだけど」

不可視迷彩は、MCDの中で、周りの景色と溶け込ませるために、高速で処理するために負荷が大きい。

3分すぎてしまうと、MCDがオーバーヒートしてしまう。

MCDがオーバーヒートするということは、オンラインゲームをやっている最中にパソコンが壊れるのと同じことだ。データの消失

……^{すなわ}即ち“死”を意味する・

「……十分……」

キリが飛び出す。それを援護するためにアヤネとヒメが銃を撃ちまくる。

キリが敵との距が20メートル切った時に、スモークグレネードを投げて、

『不可視迷彩起動』

姿を一切消す。

そして、敵はキリが消えたことを気にせずにアヤネ達の方に向かって撃っているのだけど、1人の首が真横に切れる。そして、すぐ隣の二人も頭のこめかみに、フルメタルジャケット弾を流し込まれる。銃も何も見えずに、ただ葉きょうだけが不気味に舞う。

敵も慌てているが、敵の姿が見えないためにどうすることもできない。

キリは、M16を3発ずつ正確に且つ迅速に叩き込んでいる。時に

は銃剣を使い、のど元を刺す。

そして、2分44秒で不可視迷彩が取れていき、キリの姿が見えたときには、敵の姿はなかった。

「さすが！ この不可視迷彩の弱点は、時間もそうだけど、一番は音なのよね」

不可視迷彩は、足音や銃撃音を消すことができない。そこまで処理するとMCDでは、数秒しか使えなくなってしまう。あくまで、姿を見えなくすることができるだけだ。

「これで、安心して、待つてられるわね」

アヤネ達は、ボロボロになったプラスチックの椅子に座て空を見上げる。

- 2 不穏な校舎と徹甲弾（前書き）

テイワズ

1・雅一

2・カエデ

3・シマリ

ソウイル

1・アヤネ

2・ヒメ

3・キリ

アンサズ

1・カノン

2・シノミ

3・シモハル

- 2 不穏な校舎と徹甲弾

くアンサズく

校舎を盾にして、銃撃戦を繰り広げている。

「妙ね……」

カノンが先ほどからの戦闘見て、言い合わせない感じの何か不吉な感じがする。

「敵が少ない」

今まで、15分間の内に、敵との遭遇が6回。でも、敵は、2人だけなど、小出ししている。

「敵が集まってないの？」

「もしくは、指揮系統が確立されていないからなのか……」

「情報が少なすぎる」

シモハルが、M24で敵兵を1人狩る。

「確におかしいね……」

「このまま何もなければいいけど……」

3人は、不気味な感じが漂う中、校舎を背に敵を狩っていた。

くテイワズく

パチンコ屋の中で、防戦をしていた。
駐車場には敵が群がり襲ってくる。

「まずくないか……」

スロットに当たり、中から銀玉が大量に出てくる。

敵の猛攻がひどくてしつかりと反撃できずにいた。

「照準OK」

戦車の中に、乗っているカエデが砲塔を敵に向ける。

「発射！」

周りに突風が吹く。

轟音と共に、駐車場に穴が出来る。

カエデが戦車の中にいて、シノミと雅一が外に出て戦っている。

「これでどうだ！」

M4のアングレを使って、敵を吹き飛ばす。

敵は、駐車場にある車を盾にしてこちらに接近してきているのだ。

「最悪だな」

「本当ね」

「やっぱり、マサは厄病神なんだよ」

「うっせ！」

絶望的な中でも、しっかりと覚悟をもって戦っていた。

「合図してから、30分。まだかな」

「状況は最悪！」

シノミが叫びながら、G36Cを片手もちで撃つ。そして、もう一方の手で、M67破片手榴弾を取り出して、安全ピンを口でとり、投げる。

爆発と共に、破片が舞い、敵の体に刺さる。

「あれ！ 戦車！」

目の前にT-90が来る。

「カエデ、撃つて！！」

「無理！ 照準が合わせられない」

砲塔の右下に、パチンコ台があり、動かせなかった。

「どうすれば！？」

T-90が砲塔の照準をこちらに合わせる。

轟音と共に、125？徹甲弾が飛んでくる。

運よく、右の方にはずれて戦車には当たらなかったのだが、雅一の近くに当たった。

「マサ！？」

シマリが叫んで、その近くに行くと、雅一が倒れていた。

（雅一）

徹甲弾を撃たれたときに、走ったのだが、時すでに遅く。近くに当たった。

その爆風で飛ばされたところで俺の記憶は途切れた。

「……………おれ……しんだのか……………」

「ま……さ…………おき……………」

「ま……………おきてー!!」

目を開けると、目の前にシマリがいた。
ひどく心配そうな顔をしている。

「マサ！ 起きてー!!」

「おお……………」

俺は何とか一言だけ言った後に目を開けた。
しかし、頭がふらふらして、気持ち悪さも少しあった。

「大丈夫!？」

シマリが大声で言うてくるので、耳が痛い。

「大丈夫…………じゃ、ないかも」

俺は、瓦礫に手を付けて立ち上がる。

目がぼやける。

フラフラして、転びかける。

「しっかりしてくださいよ！」

シマリが肩を持つ。

「あ、ありがとう……」

「死んでないだけ、ましですよ」

「そうか……」

シマリと一緒にT - 90の近くまで行く。

その間にカエデが敵のT - 90を撃墜する。

「マサ！ 大丈夫！？」

カエデが砲撃した後に顔をのぞかせる。

「……だいじょうぶ」

大声でしゃべれなかった。

「無理しないでください！」

『前に倒れて』

俺のヘッドフォン…いや、頭の中に声が聞こえた。

俺は勝手に体が動いて、シマリと一緒に前に倒れる。

「ちょ、ちょっと!」

シマリも一緒に倒れた。

地面に当たると意外に痛かった。

その直後に、頭上を何かが飛んでいき、少し先で爆発した。

「あれ…RPG!？」

シマリが驚いている。

RPG……たしか、ロケット砲みたいな奴だったような……

「ほら、シマリたて」

大分意識が取り戻してきた。

「運が良かったです。あの時に倒れてなかったら、直撃をくらってました」

シマリがホッとする。

「……………あの、声は……………」

突然響いた声、女の子っぽい可愛い声だった。

「……………何なんだ……………」

俺は、頭をフル回転して考えようとしたのだが、頭が重く無理だった。

このゲーム、リアルすぎなんだよ！ 心の中で突っ込んでしまった

「2人とも早く！」

カエデが大きく手招きをする。

カエデと合流する事が出来た。

その安心感で、先ほどの声の事を忘れてしまった。

くティワズく

雅一と、シマリは何とかT-90の車体に隠れる事が出来た。

「どうするんだよ!」

意識がはつきりしてきた雅一が叫ぶ。

「最悪よ!!!」

敵は、30人近く群がり、Ak-47や、RPG-7を撃ってきている。

3人が、戦車を盾に隠れていると、駐車場に銃弾の嵐と、ロケットが降り注ぐ。

すごい爆音を奏でる。

「何!?!」

カエデが良く見てみる。

「あれ、ブラックホーク! 煙に気付いてもらえたみたい!」

「まじでか!?!」

「やりましたね!!」

3人は、駐車場に走って出て行った。

- 1 救出と合流（前書き）

テイワズ

1・雅一

2・カエデ

3・シマリ

ソウイル

1・アヤネ

2・ヒメ

3・キリ

アンサズ

1・カノン

2・シノミ

3・シモハル

- 1 救出と合流

くソウイルく

「……きた」

3人は、特に激しい銃撃戦も行わずに、散発的な戦闘を繰り返していた。

「本当ね。UH-60。味方ね」

アヤネがよく見てから言う。

「私たち、やりましたわ！」

ヒメが喜ぶ。

こちらの姿を確認できたのか、野球場のグラウンドへと降りてこようとする。

砂埃が舞う中、3人は駆け足で近づく。

ブラックホークが、地面に着地することに、扉が開く。

「クラン“月下の灯”の方たちですよね」

中から、M249をもった男の人が出てくる。

「はい、そうですわ」

ヒメが大声で答える。

それほど、周りの音がうるさいのだ。

「それでは、乗ってください」

「はいですの」

「わかった」

「……了解」

3人は、ブラックホークに乗り、空に舞い上がった。

「—安心ね」

「そうですわね」

「……」

ブラックホークから、木更津の景色を眺めていた。

「アンサズ」

「あっちゃーM24の弾薬がなくなった」

シモハルが断続的に狙撃をしていたために、すぐに弾切れになった。

「それなら……M95を使えば？」

「でも、弾薬が少ないから、すぐになくなっちゃうよ」

M95とは、バレットM82のボルトアクションモデルで、M82よりも軽量でコンパクトな対物ライフルとなっている。

しかし、弾薬は持っておらず、五発しかなかった。

「カノン、ハル！ ブラックホークが見えたよ！」

シノミが走ってこちらに来る。

「グッドタイミングね」

「行きましょ」

カノンとシモハルは、階段を下りて、昇降口から、校庭に飛び出す。ブラックホークがこちらに来て、降りようとしていた。

そして中から、M95をもった男の人が扉を開けて、大声で話しかける。

「クラン“月下の灯”の人たちですよね!？」

「はい!!」

大声で返す。

「少し待ってくださいね!」

男の人が叫んだ瞬間。

校門のあたりから、RPGが飛んできて、ブラックホークのヘリロターに直撃して落ちる。

「逃げて!」

カノンの声と共に走って離れて行く。

ブラックホークが校庭に後ろから墜落した。

シノミが校門あたりにいた。2人の兵に5・56x45mm弾を撃ち込み倒れる。

カノンたちは、ブラックホーク墜落現場に急いでいく。

ブラックホークは、後ろの方は原形をとどめていないが、前の操縦席の部分はきれいに残っていた。

「生きてる!？」

シノミが操縦席部分を除いたので、カノンが聞いてのだが、首を横

に振る。

「だめ運が悪く、破片が首に当たってる」

シノミが悲しそうな顔をするが、すぐに元に戻す。

「こっちには、M95の弾薬と、XM8が2丁おいてあったよ。他にも、5.56x45mm NATOがいっぱい」

XM8は、軽量なアサルトライフルで、取り回しなどや使いやすさ
はいいのだが、命中精度がよくない。

「それは、いいことだけど、これで救援がなしかな」

「こちら、ミステイ。どうしました!？」

無線から若い女性の声が聞こえた。

カノンが生き残っている無線機を使って話しかける。

「こちら、“月下の灯”のクランリーダーですが、ヘリに乗っていた2人は、死亡しました。」

「ほんとうですか! どうしよう……他のヘリは、いないし……」

「救援は、困難です。敵の位置わかりませんし、RPGで撃たれることもありますから」

「ちょっと、待ってくださいね……え! そっちでもですか!」

「どうしたんですか？」

『一つは成功したんですけど、もう一つもRPGの襲撃で救援は無理だという状況です』

「それなら……今から、そちらに合流しますね」

『それが、ベストです。お願いします。合流地点は……そこから、1？ほど西南西に行ったところにある学校にします』

「了解です」

『なるべく、空からの支援はします。ご武運を』

無線が切れる。

「さて、これから1キロの行軍よ」

「武器と弾薬は、たくさんあるから、焦らずに行こう！」

「XM8を2丁持つてこつと。この世界がゲームで助かるわ。背中や、腰にかけてある武器の重量は、なしになってるから、重い武器をいくつでも持ってこれるんだから」

「たしかに……」

シノミが、ヘリから無線機を外して背負う。

3人は、合流ポイントへと急いだ。

「テイワズ」

上空では、ブラックホークが銃撃を加えてこちらに来ていた。

「外に出て、知らせないと」

3人は、外に出ていき手を振る。

その間に、あらかたの敵は、ブラックホークによって排除していた。

「降りてくると思った時に」

ブラックホークにRPGが飛んできて、何とか当たらずに済んだのだが、それ以上降下できずにいた。

その時、ヘリからロープを垂らしてラベリングしてくる一人の女の姿が見えた。

さらにRPGが来たときには、降り切ってこちらに来る。

離れようとしたときに、もう一人もラベリングで降りるのではなく、滑ってくる女の姿が見えた。

「ヴァルキュリアドラグーン」

UH-60で降りようとしたときに、敵のRPG-7が飛んてくる。

「これ以上の下がることは無理です。RPGの直撃を受けます!!」

ヘリの操縦員が叫ぶ。

「作戦失敗ね。でも!」

ヴァルキュリアドラグーンの隊長がロープをUH-60に括り付けて降りる。

「シグレ!! まったく無茶するんだから!」

隊長こと、シグレが地上へ降りる。

「これ以上無理です。一時退却します」

ヘリの操縦員が言うと、もう一人が無線機を背負ってシグレの事を心配している隊員に向かって言う。

「世話がかかるな!! 私は、隊長の援護に行くから。ヘリは一時退却して、司令官に今後の作戦を聞いて!」

それだけ行つてロープを滑って行く。

く ティワズく

2人がこっちにくる。

先にロープで降りてきた子は、黒髪のショートの子だった。

「私は、ヴァルクリアドラグーンのクランリーダーです」

冷静なように透き通ったそんな声だった。

続いて、ロープを滑ってきた子もこちらに来る。赤髪のポニーテールの女の子だ。

「シグレは、世話がかかるな！」

明るい感じではあるが、どこかトゲのある声だ。

「私は、シグレ」

黒髪のショートの子が言う。

「自己紹介といきますか。私は、サキ」

赤髪のポニーテールの女の子言う。

「こちら、ミステイ。応答してください！」

サキの背負っていた無線機から声がする。
それを、シグレが取る。

「こちら、ドラグーン。作戦失敗です。救出は無理でした」

「そうなんですか!?!」

「RPGの猛攻がすごくて、」

『そうなんですか…………… え！ ちょっと待っててくださいね。ヘリが落ちた！？』

その後に突然無線が切れる。

「ヘリが落ちたらしい」

シグレが冷静な顔をして言うと、3人の顔が青ざめる。

その間にも、ブラックホークの援護があり、敵は来ない。

数分後、連絡が来る。

『こちら、ミステイ。コールサインチェンジで、HQとします』

「了解」

『今確認したところ、もう一つの回収地点で味方のヘリが落ちて、操縦員含めて、二名死亡。そして、月下の灯のクランリーダー含めてた三名は、そちらと合流するために、ちょうど東北東の学校へと向かっています。至急、合流してください』

「こちら、ドラグーン。了解」

無線を聞いた後に、みんなの方を見る。

「みんな聞こえた」

「ああ、聞こえた」

「聞こえました」

「きいたよ」

「はいよ！」

他の4人が頷く。

「それじゃあ、弾薬と武器を味方が落としてくれたみたいだから、弾薬の補充をしてから、行きましょう」

「この中で、スナイパーいる？」

「私です」

カエデが手を挙げる。

「それなら、これ。ついでに持ってきたから」

「これって、HK417のスコープ付き」

「しっかりと、狙撃仕様だから」

「ありがとう」

HK417は、M4を近代改修したバージョンで、HK417は、

7・62×51mm NATO弾を使用できて、精度もよく、使い勝手はよい。

「行きましょうか」

シグレが言うと、みんなが頷く。

「俺は、マサだ」

「私は、カエデね」

「シマリです。よろしくお願いします」

「了解、マサにカエデにシマリね」

「こちらこそ、よろしく」

新たに2人加わって、5人はカノンたちと合流するために移動を開始する。

0 所持武器

ミノマサ

メイン M 4 M 2 0 3 グレネードランチャー 装備

サブ M P 7

ピストル M P ・ 4 3 3

カノン

メイン M K 4 8 M o d 0

サブ X M 8 x 2

ピストル シグ ザウエル P 2 2 6

シノミ

メイン G 3 6 C

サブ H & a m p ; K U M P

ピストル グロツク 1 8 C

シマリ

メイン AUG A3
サブ MAC-11
ピストル グロック17

カエデ

メイン HK417 スコープ付き
サブ スパス15
ピストル ワルサー P99

シモハル

メイン バレットM95
サブ ベネリ M4 スーペル90 米軍のM1014
ピストル ニューナンプM60

シグレ

メイン SCAR-L
サブ XM25 IAWS
ピストル USP45

サキ

メイン M27 IAR x2

サブ なし

ピストル S & a m p ; W M500

M21 x1

M67 破片手榴弾 x 多数

スタングレネード x 多数

スモークグレネード x 多数

発煙筒 x 多数

ナイトビジョン（暗視装置） x 4

1 意気消沈 そこからの頑張り

「テイワズ&ドラグーン」

5人は、東へと向かっていた。

「敵、こないようですね」

シグレが先頭で、マサ、シマリ、サキ、カエデという縦一列の隊列で進んでいる。

「しずかね……」

不気味な静けさを放っていた。
足音しかない。

「お化けでも出そうだな……」

「ゲームだから、お化けなんてではないわよ」

雅一の言葉をシグレがすぐに否定する。

「もしかしたら……後ろに……」

「後ろにいるのは、あなたでしょ。さっきから、うるさい」

「すみません」

あれこれ、10分は歩いている。

太陽が、ちょうど真上を照らしているところだった。

「ストップ」

シグレが手で止める。

「前方に6人」

3階建てのビルと民家との間に6人いた。
こちら、角にいるために敵は気づいていない。

シグレが手招きして、全員が輪になったところで、小声で話す。

「敵は、6。まず、サキの機銃放火でかく乱して、カエデの狙撃。
そして、私たちはその援護わかった？」

すぐに作戦を立案する。

「わかったぜ」

「狙っちゃう」

「わかりました」

「はいよ」

全員が、銃のセーフティを外す。

「3、2、1、G O G O」

「全弾もってけえ！」

サキが、飛び出して、右手と左手のそれぞれにM27 IARを構えて、2丁で撃つ。

狙わずに、とにかく撃つ。右から左へときれいに流していく。

それによつて2、3発があつたりして、倒れたりする。応戦しようとしたところで、カエデのHK417が火を噴き、2人の頭にどんぴしゃりで当たる。

他の3人も、リズムよく撃つことで、すぐに戦闘は終了した。

「らくしゅう！」

カエデがVサインを送る。

「楽だった」

サキがM27 IARを2丁肩にかける。それぞれの銃には、100発撃つ事ができるベータC・マグが弾倉となっている。

M27 IARは、M249の後継として、HK416を参考に作られた銃。軽くて、機動性はいいが、連射性能はM249より落ちてしまう。

ベータC・マグは、丸みおびた弾倉。リロード時において、手早くおこなえる利点がある。

「もうすぐだから、早くいくわよ」

シグレは、淡々として前に進んで行く。

それについて、4人も歩き出す。

くアンサズく

「ゲームで死んだんだから、現実でも死んだんですね……」

走って合流地点に向かうとしている時に、シノミがつぶやく。

「あの神という人が作ったルールが、本当なら、そうなるかしらね」

「あつけないもんですね……」

「私たちは、ゲームしてるんじゃないんだから、生き残りをかけた戦争してるんだから」

「最近になって、よけいにそう感じます」

シノミが暗い顔になる。

「暗い顔しなさんなって、大丈夫だよ！」

シモハルが笑いかける。

「そうですかね……」

「そっだよ！ そっだよ！」

「とにかく、急ぎましょ」

3人は、急いで合流地点へと向かう。

（館山統合司令所）

「どうでしょう……」

マユミは、頭を悩ましている。

ヘリが一機落ちて、さらにはもう一機も救出不可能という結果になってしまった。

「詰めが甘いな……」

もっと、戦闘ヘリを送っておけば……。
もっと、爆撃機を送っておけば……。
など、いろいろと考えてしまう。

『マユミ、どっするのっ。』

「ヨウコさん……」

別任務を行うために待機しているヨウコから、無線がかかる。

『状況は、大方聞いたわ。それで、どうするの？　こっちの部隊はみんな準備OKよ』

「どうしましょう……このまま、送ったら……また部隊の損害が増えるかもしれません」

マユミの声が震える。たった1人でいる司令所の空気が重く感じる。

『死んだのは、事実。でも、死なないためにどうするかは、過程』

「過程……」

『そう、死んでしまったのは事実で、どうしよもできない。でも、死なないためにどうすればいいかは考えるだけ、それで生き残ればOK！　だから、過程は大切。結果が死んだというのかもしれないけど、あなたが信じた過程……作戦を自分自身で信じないと、もつと死ぬことになるよ』

「私が信じた作戦……」

『あなたは、必死に考えた結果がこれだけなら、あなたはそこまで……どうするかじゃない、何をすればいいのか。それを考えないと』

「どうするか……何をすればいいのか……」

『あなたの必死に考えた作戦……過程なら、結果がどんなになろうとも関係ない。あなたが信じぬいた過程なんだから。それで、誰か

が恨むかも知いない、怒るかもしれない。でも、数人でも感謝してくれる作戦を考えたなら、あなたの作戦に自信を持ちなさい。これは、裏で政治事情が重なった戦争とかじゃないんだから、もっと純粹に、自分を信じて!!」

「自分を信じる……」

『そう！ 自分を信じて!』

「わかりました。自分を信じてみます」

曇りが少し取れた気がする。

まだ快晴とまでは、いかない。

この先、雨が降るかもしれない。

それでも、雲を越えればいいんだよ。

あの白い雲を越えれば、

真上には、大きな宇宙が広がっているんだから。

「雲を超える調子……よし!! ヨウコさん、私はまだ全然、軍事の事は詳しくありません。でも、何をすれば生き残れるかを考えま

す」

『よくいった！　それでこそ、マユミだ！　それじゃあ、がんばんなよ！』

無線が切れる。

「よし！―！」

自分の頬を叩き、考え直す。

これで、ヨウコさんに言われるのは2回目だな……と思いつつ作戦室に行き、シュミレーターとにらめっこをした。

2 合流成功 ドラゲーンの実力

「テイツズ&ドラゲーン」

学校が見え始めた。

「あれか？」

「そうね」

シグレがMCDのマップで確認をしてから頷く。

「やっとか……」

たった一キロ進むだけに、1、2時間をかけて移動していた。

「敵とはなるべく、交戦したくないから」

「家は、もっと敵を倒したい」
うち

「サキ、飛び出さないように」

「子供か！」

少し進んで行くと民家の横の角に、敵の兵が3人いた。

「もらい！」

サキが飛び出していく。

「サキ！」

シグレが止めようとして飛び出す。

「さっそく、破ったぞあいつ……」

「みんな！ 付いて来て！」

シグレに言われて、全員が走ってついていく。

サキはM27 IARを、フルオートではなく、3発ずつ丁寧に当てていく。

1人が、倒れて。もう1人は、頭に当たり即死。

最後の1人は、シグレが飛び出していく、相手のAK 47をもった腕をつかむ。相手は、AK 47を乱射させる。

そのまま、敵を一本背負いをして、最後にUSP45を腰につけているホルダーから抜き取り、頭に撃ちこみ殺す。

何発がくらってもしぶとく生き残っていた最後の1人を、サキがコンバットナイフで首の根元を裂き殺す。

USP45は、拳銃で・45ACP弾という大型の銃弾を使っていることが特徴的。軽量で高威力なので、対テロの特殊部隊などが好

んで使っている拳銃だ。

「一本背負いつて……何気にチームワークがいいな」

雅一は、一連の動作に隙がなく、凄いと思った。

「しかし、ヴァーチャルでも疲れるんだな……」

雅一が、肩などを回す。

「そりゃ、肉体的負担がない代わりに、精神的な負担が多いから」
シグレが丁寧に解説する。

「精神的負担？」

「そう、周りの物を確認するだけでも、人にとつたら負担になる。これは、ビルだとか、これはUSP45だと考えるだけでも疲れる。だから、ヴァーチャルでも疲れるし、寝ることも必要なの」

「なんとなく、わかった」

学校の校門へと行く。

「ストップ」

止めてから、塀にそって移動する。そして、鏡を使って、反射させて中の校庭と校舎を見る。

「いないようね……ミノマサは、ここで待機」

「俺の名前は、マサでいい。それで何で待機？」

「マサね。回答は、校門を見張ってて」

「了解つと」

雅一は、セメントの塀にもたれかかる。

シグレを先頭に校舎の中へと入って行くのを眺めている。

「暇だな」

雅一は、疑似的な空を眺める。

この青空全てが、ヴァーチャルだと思えないぐらい、現実を忠実に再現している。

この不気味なVRの世界に来てから、数日が経過したが、慣れたとは思えない。

「現実^{リアル}の世界の俺は、どうなってるのかな……」

このゲームの体感時間と、現実の進むスピードは違う。
ゲームの方が倍の時間、いられることになるのだ。

現実で 12時間過ぎたらな、こちら仮想^{VR}では、24時間経過していることになる。

「大丈夫かな……」

かえってこないことを心配したが、突如

「動くな！」

後ろから声がして、素直に、手を挙げる。

「な、なんだよ……」

雅一は、ここでダメなのかと思ったのだが、振り返ってみると、

「カノン！」

「はい」

カノンとシノミとシモハルがいた。

「脅かすなよ……」

「こんなところで、突っ立てる。あんたが悪い」

「そうかよ……」

「待ってろ、連絡するから……」

雅一は、MCDを取り出して、インカムで連絡する。

「いちら、マサ」

『どうしたの？』

シグレの声が返ってくる。

「カノン達、別の部隊がこっちに来たぞ」

『了解、校舎の中に入って来ていいわ』

「わかった」

インカムを外す。

「校舎の中に、入っていいってさ」

「いこう、いこう」

4人が校舎の中へと入って行く。

そして、カエデが校舎に待っていた。

「みんな、元気でよかった」

「無事だね〜」

シモハルとカエデが抱き合って再会を喜ぶ。

「こっちだよ〜 付いて来てー！！」

カエデの先導によって3階にある教室に入る。

そこには、シマリや、シグレ、サキがいた。

「見ない顔が、2人」

カノンたちが教室に入って来て、つぶやく。

「私は、シグレ。クラン“ヴァルクキュリアドラグーン”のリーダーよ」

「家は、サキ。よろしく」

先に、2人が自己紹介してきたので、それに続いて

「カノンよ。月下の灯のリーダー」

「シモハルです。よろしく」

「シノミ」

「了解、まずは無線で」

シグレがサキが背負っていた無線機のスイッチをオンにする。

『こちらHQ』

マユミの声がする。

「こちら、ドラグーン。合流地点で、2部隊の合流に成功」

『よかったー。それでは、今から1時間後に、爆撃機を飛ばして、

絨毯爆撃じゅうたんばくげきをするので、学校で待機しててください。IFFを忘れずに」

「ドラグーン了解」

無線を切った。

「それじゃあ、MCDを貸して、IFFの設定をしないと」

シグレが言ったら、全員がMCDを渡している中で、雅一が首をかしげる。

「IFF？」

「敵味方識別の事よ。これないと、爆撃機に間違えて、殺されるかもしれないんだから」

カノンが答える。

「そりゃあ、重要だな」

雅一が、MCDを渡す。

数分もしたら返す。

「これから、1時間、休憩ね」

「見張りは？」

カノンの発言にシグレが問い返す。

「対人センサーを付ければOK！ 校門や、その周りは設置済みよ」

「あら、それは用意周到で」

「だから、校舎の中に、設置するだけ」

カノンが教室を出て行った。

束の間の休息が出来たのだ。

3 平穩無事 不穩な時間の経過

く雅く

俺の周りには、いつものメンバー プラス、シグレとサキがいた。

「コールサインを変えないと」

オレンジ色の髪の毛が目立つ、カノンが口を開く、毎回、最初に行動を起こすやつだからな

「コールサインですか？」

次は、こいつシマリだ。妙な丁寧口調な言葉で言ってる。

「それなら、面白い奴にしようよ!!」

「それいいね」

茶化して、ふざけあうのは、茶髪のショートのカエデと青色の髪で、後ろでまとめているシモハル。狙撃の腕はいいんだが、どこか拍子抜けする感覚がある。

「何がいいかな……」

茶髪のサイドポニーで腕を組んで深く考えている奴が、シノミ。本

名は……美夏だったっけ？ まあ、このクランから一歩引いたところがあったけど、最近、大分慣れてきて、カノン達と気軽に話しかけているみたいだ。

「8人……分隊を二つに分けるから、二つ必要ね」

そういつて、冷静に分析する黒髪のショートで背がちっこい奴が、さっきに、仲間になったシグレだ。

「暇だな〜」

椅子の上でだらとだらけているのが、シグレと一緒にきた赤髪のポニーテールでサキって名前だったはずだ。

「マサ、何がいいと思う？」

カノンが俺の方を見て、いきなり聞いてくる。

コールサインね……

「すごく変な事を聞くが、コールサインって何のために必要なんだろう？」

「はあ……」

カノンが睨んでくる。

「映画とかでは、かっこいいと思うが、今コールサインを考えると、迷って使い図ラインだ」

実際、使っていて、時々考えないと出てこないことが多々ある。

「そんなの、相手に、情報を与えないようにするためと、作戦の内容を知られないため」

「へえ〜」

何となく、わかったような気がする。

「それでどうするんだ？」

「だから、それを考えてるんですが、学習能力なさすぎ」

「悪かったな」

「まあ、2人とも落ち着いて」

シマリが俺とカノンの間に入ってくる。

落ち着かないと、と思い、深呼吸する。

「それなら、トリックスターを切って、トリックとスターは？」

サキが、椅子に座りながら言った。

「トリックとスターね。いいんじゃない？」

カノンとシグレが頷いた。

「トリックスターって？」

「物語を引つ掻き回すこと、ちょうど、ゲームのルールをひっかきますから。ちょうどいいの」

「引つ掻き回すね……」

「それで決定ね、トリックとスター」

シグレの頷くと、決定していた。

「トリック&スター」

「サキとシグレは、何が得意？」

カノンが2人の特性を聞く。

「私は、中距離射撃系なら。サキは、火力支援」

「それなら、トリックのリーダーを私。スターのリーダーをシグレ」

「わかった」

シグレが頷く。

「それで、トリック1が私、2がサキ、3がシノミ、4がシマリ。つてとこかな」

「スターが、2がマサ、3がカエデ、4がシモハル」

「了解」

「わかりました」

「了解です」

「イエス、マム！」

「アイアイサー」

「了解つと」

「これで、コールサインも決まったところだし、司令所に連絡しないと」

カノンが無線のスイッチをオンにする。

『こちら、H Q』

「こちら、ドラグーンと立てこもり犯です」

『立てこもり犯って、それでなんですか？』

カノンの冗談を軽く流した。

「コールサインが決まったので、報告しておきます。トリックスターの二等分です」

『H Q、了解。爆撃時間が、あと45分後です。それで、ヘリ

との合流地点は、木更津駅周辺のビルの屋上にします。そこから発煙筒で合図してください。爆撃から3時間後とします』

「こちら、トリックスター。了解」

『それで、月下の灯の三名は、救出成功しました。以上』

「了解」

無線のスイッチをオフにする。

「アヤネ達が生きてるって」

「よかった」

シノミが真っ先に安どする。

「そんなにヒメの事が心配だった？」

「そ、そんなわけじゃないですか」

シノミが慌てたように言った。

「アヤネ達なら、心配はないね。どうせ、チートの事してるから」

「チートの事って？」

雅一が聞いた。

「それは、アヤネがプログラミングが得意だから、変なツールでも作ってるのかな？　と思って」

「ああなるほど」

雅一は前に、アヤネが作った戦車の小型AIを知ってるので納得できた。

「そういえば、戦車放置してきたんだな」

「それなら、細工しておいたので大丈夫です」

「細工？」

シマリの言葉に疑問を持つ

「はい、AIを戦車の中に入れて、自動で動くようにしておきました。とりあえず、熱で敵を認識して戦ってるはずです」

「AIって便利だな……」

AI…… 人工知能と言ってもいい

「AIは、最近のVRMMOじゃ、欠かせないからね」

言われた通り、最近のVRMMOは、AIを使っているタイプが主流になってきている。AIに学習させているのだ。

「このGCTは、AIが5つも使ってあるんだから」

カノンが補足的に説明する。

「5つ？」

「そう、各エリアごとで、一つずつのAIが使っているんだから贅沢よ。最近のVRMMOでも、AIは1、2個が普通なのに……」

「そうなのか……」

雅一は、仮想の空を見上げる。

その後は、それぞれがリラックスして、爆撃時間まで、平穏な時を過ごした。

く???く

「まったく、任務だからって面倒だな」

輸送機にある男が乗っていた。

その男は、体格がよく筋肉質の男だった。歳は、二十代半ばぐらいで、黒髪がとがっていた。

「そんなこと言わずに、試作の実験戦闘なんですから」

もう一人、やせ細って、メガネをかけた、こちらも二十代半ばの男がいた。

2人の体格は、対照的だった。

「それでも、今回の任務は骨がありそうだな」

「そりゃあ、敵のど真ん中に強襲するんですから、でも、あくまで、試作のテストですからね」

「ああ、わかつたるよ」

その男はどうでもいいかのように答える。

「まったく、あの狸は、こんな任務ばかり押し付けてやがる」

「それでも、最新装備を持っていけるから、いいんじゃないですか？」

「そりゃあ、そうだな！」

輸送機の中には、その他にも屈強な兵士が数十人座っていた。

「さあ、でっかい花火を上げるとするか」

輸送機は超高高度から侵入していた。

4 奇襲回避 ドックファイト（前書き）

間隔があいてしまい、すいません。
前回までのあらすじを書いておきますね。

雅一たちは、アクアラインを突破し、木更津に入る。
しかし、そこで敵部隊が空からきて、絶体絶命に

館山統合指令所では、救出作戦を開始する。

その時に、キリ、ヒメ、アヤネは回収することができたのだが、ほかの6人が取り残されることに……

雅一、シマリ、カエデの3人は、シグレ、サキと合流し、カノンたちとの合流ポイントへと急いだ。

そして、合流に成功して、爆撃機が来るのを待っていた……

4 奇襲回避 ドックファイト

「トリックスター」

「ふう、まだかな」

みんなが思い思いに、椅子に座りながら、時間が過ぎる。

「そういえば、NPCにレベルってあるのか？」

雅一は、そういえばみたいな感じで聞いてみる。

「あるわ、S、A、B、C、D、Eまで」

カノンがこの問い答える。そして、シグレなども黙って頷く。

「Sが特殊部隊のさらにレベルが高いタイプ。そして、A、Bが特殊部隊レベル。C、Dが軍隊経験を積んだレベル。Eが軍事訓練を少ししか受けていない、民兵レベル。こんな感じに分かれてるわ」

「レベルが違つと、何が変わるんだ？」

「まずは、反射神経や、射撃技術や格闘技術。一番変わるのが、武器ね」

「武器？」

「レベルの上がることに、武器が変わって行くの。Eの民兵レベルは、AK 47が主流なんだけど、Sの特殊部隊レベルは、現存しない武器も使ってくる」

「現存しない？」

「商品として、市場に出回っていないタイプ。それこそ意味わからないぐらい強い武器もある」

「まじかよ……………」

「Sタイプは、滅多に表れないわよ。それこそ超高難易度なミッシェンじゃない限り」

「なるほど……Sタイプと遭遇したら、すぐ逃げろ、ってことだな」

「まあ、そんな感じね。今まで、最大でCタイプまでかな」

「あれで、Cかよ……………」

今まで何度も苦境に立たされていたので、想像しただけでもウンザリ。

凄まじい爆音が鳴り響いた。

「え！ 何で！？」

カノンが驚く。連絡もなしに爆撃が始まった。

「こちらトリックスター、HQ、どういうこと？」

カノンが無線機を持って、連絡を取る。

『わかりません。爆撃隊のB - 52は、あと15分かかるはずですよ。マユミもおわ手ている様子だった。そのことは声からわかる。』

（館山統合司令部）

「こちらHQ、どういことですか？」

航空部隊に無線連絡を取る。

『こちらコーラル1、目標ポイントまで到達してません』

フラワーリングの克蘭リンダーが返答する。

実際、彼女たちは、B - 52を守るようにして編隊飛行をしている。

「えっ！ それなら誰が爆撃を？」

『こちらのレーダーには写ってません』

「もう一度確認してください」

『みんな、どう？』

『こちら、ハンター2、さっきから鳥みたいなのが、上空に飛んで

るだけです』

『鳥！？ ハンター2、数は？』

『たぶん24匹ぐらい、数が多いですね。それに飛んでる間隔が大きい』

『それは、たぶん敵の戦闘機か、爆撃機よ』

『えっ！』

『こちら、コーラル1、これから全機帰還します。』

「急いで戻ってきて」

たかが、十人程度を殺すのに、ステルス機まで用意するのは、おかしい。そう判断する。

「いったい……何が目的……」

『コーラル1、敵の襲撃を受けます……振り切れない』

くフラワーリングく

「全機、急転回して、帰るわよ」

『こちら、オールドボンバーズ、了解』

オールドボンバーズとは、爆撃機専門のクランで、今回の作戦でB-52を6機で来ている。

『ハンター2、鳥がこちらに動き始めました』

「了解、今後、敵のサインをバードで、全機、爆撃機を逃がすわよ」

「了解」x7

たった、8機しかないなかで、勝ち目はほとんどなかった。

『こちら、HQ、敵をそこから南南東の20キロ地点まで移動させてください』

「えっ！ 何で？」

『そこには、レーダー施設のちょうど重複地点で、三か所同時にレーダーで観測する事が出来るので、ステルス機でも引つかかる筈です。』

「了解、全機聞いた？ 今から高度を一気に落として、低空飛行で敵をおびき寄せるよ」

「聞きました」

「ラジャー」

「ウィルコ」

「わかりました」

それぞれ、了解の答えが返ってくる。少し緊張している様子が見える。

「それじゃあ、行くわよ」

F - 15 E 及び、F - 14 D が一気に高度を落とす。

「鳥は、全部で12機です」

「おおいわね……」

8：12、さらには敵の方が高性能機なのは間違えない。

「このまま低空から、目標ポイントまで、いくわよ」

F - 15 E / F - 14 D は、低空から一気に加速。

機体には風がかかり、激しく動こうとするが何とか抑える。

「しつかり、しなさいよ……」

F - 15 E のレーダーが役に立つ、この F - 15 E についているレーダーは元々地上爆撃用の地形追随飛行が使えるのは、かなりいい。これによって、スムーズに飛行が出来る。F - 14 D は、データリンクによって、なんとか飛んでいる状況だ。（F - 14 D のデータリンクは、ここまでいいものではありません。あくまで、何回も改造をした結果です。忠実どおりではありません）

「鳥さんたちは、上から来てます」

「レーダーはいいようね」

それぞれ緊張した声が聞こえる。あと10キロで、ポイントにつく。

「ミサイル！ 6」

レーダーを見ると6つがこちらに高速できている。アラームが鳴り響く。

「ブレイク！」

低空のままで、全機がわかる。

「こちらハンター3、後ろにミサイル2」

「こちらコーラス2、1付いて来てます」

その他のミサイルは、地上に激突だが、3も残った。

「コーラス1、ハンター3のカバーにはいる」

「ハンター1、コーラス2をカバー」

それぞれ、ミサイルの後ろに回り込む。

その間に、ハンター3とコーラス2は、いろいろな機動するが、ミサイルは忠犬のようにへばりついてくる。

「鳥が、こっちにむかってきます」

そんな状況でさらに、敵まで来てしまっている。

「コーラス3、敵の誘導に入る」

「コーラス4も同じく」

その後4機は、すこし高度を上げて、敵を誘い込む。

「もうだめ！」

ハンター3が諦めかけたときに、

「ハンター1、フォックススリー」

F-15Eの機銃放火によって、一つ爆発して、もう一つも誘爆によって、爆発する。

しかし、運悪くその爆発がF-14Dの片翼をもぎ取って、エンジンも一つ奪い取った。

「ハンター3、ベイルアウト！」

ハンター3の乗り込んでいた2人は、脱出。

F-15Dは、そのまま山に激突した。

そのことに、もう一方のミサイルは何とか片付ける事が出来た。

「コーラス4、ベイルアウト！」

上空でドックファイトしていたF-15Eがミサイルによって、撃破される。

何とか2人とも脱出はできたようだった。

「ポイントに到達」

『HQ、対空ミサイルを射出。あと1分』

「了解、みんな後1分」

敵は、黒迷彩で不気味におって来ていた。

「フォックスツール」

ミサイルを撃つのだが、チャフとフレアで防がれる。

そして、もう1キロ進んだところで、味方のミサイルが飛んできた。

「全機、当たらないように!!」

そのまま一気に低空飛行に移行してから、回避行動をとる。

そして、何とか逃げ切る事が出来た。

しかし、敵が爆発した跡は一切なかった。

「敵が強い……」

損害2機と思わぬ奇襲を受けた。

く 館山統合司令部 く

「どういふこと……」

ここまでする意味がわからなかった。

疑問が増えていくなか、頭を抱えて悩んでも解決しないので、この状況を打破する方法を模索した。

4 奇襲回避 ドックファイト（後書き）

拍手ボタンを設置したので、お気軽に感想などください。

魔法や、スキルの案も募集しています。

5 雑談接敵 一番前 一番偉い (前書き)

トリック 1 カノン

2 サキ

3 シノミ

4 シマリ

スター 1 シグレ

2 雅一

3 カエデ

4 シモハル

5 雑談接敵 一番前 一番偉い

くトリックスターく

「さつきから、うまく通信が出来ない」

カノンが無線機を持ちながら言う。

実際の所、時々声が途切れてしまい、うまく通信できない状況。

「なんか、いやな予感」

シグレが何とも言えない感じを覚えた。

「とりあえず、移動を開始しておいた方がいい気がする」

「そうおもう。南の木更津市内に向かって移動しましょう」

サキとカノンも、シグレの言ったことに賛成する。

「爆撃終わりましたよ」

シノミが外の様子を見ている。

爆撃は止み、爆音がなくなる。

「なあ、そういえば海から逃げられないのか？」

雅一は、乗り物には何でも乗れるから、それで海に逃げてもいいんじゃないト思った。

「海は、ダメ。このゲームには、軍事用の舟。例えば、イージス艦や巡洋艦はないの。あと潜水艦も。乗れるのは、せいぜい漁船レベルぐらい。そんなに乗ってると、陸地から簡単に狙われて、ドン！よ」

「それは、ごめんだな」

「南に行きましょう。無線機は、マサとシマリが持つて行つて」

「了解」

「わかりました」

雅一とシマリが無線機を背負つて、その他、全員が銃の点検。そして、その10分後には、学校を出て南へと急いだ。

「2つに分ける？」

サキが学校をでて、校舎を横切っている時に聞いた。

天気は、生憎あいにくの雲で覆われている。

さらには、いたるところで煙が上がっており、鉄のにおいが鼻を突きぬけていく。

「2つに分けるのはなし。今回も3つに分けたのが、失敗だったし」
カノンが今回手痛い経験をしたので、まとまって行動したいと思っている。

「そうね。でも、前衛はトリックが先行、それをスターがカバーする形で行く。それで中心の指揮官がカノン。それで行く」

シグレが2人の意見をまとめて、提案する。

「了解よ。それじゃあ、前衛のトリックから、行くわよ」

くトリックく

校門に近づいて辺りで、トリックのメンバー。カノン、サキ、シノミ、シマリが塀に近寄る。

「これから、無線で会話。そして、コールサインを使うこと」

「了解」

「わかった」

「わかりました」

カノンの言葉で3人は動く。

「トリック1、今から右に行くから、トリック2は左。3は私のカバー。4は、2のカバー」

「トリック2、ラジャー」

「トリック3、いつでも」

「トリック4、わかりました」

カノンが校門を出て、右にしゃがみながら銃を構える。
同じようにサキも左をでて、走り出す。

その後ろから、シノミとシマリが銃を構えながら進む。

「トリック1、敵なし」

「トリック2、同じく」

「トリック3、敵は見ない」

「トリック4、敵はいません」

「それなら、左から行くから、トリック2、3は、先行。私とトリック4は、横側の敵を警戒。スターは、後ろから付いて来て」

サキとシノミが、ゆつくりと慎重に進んで行く。

足音しか聞こえない。

その後ろから、カノンとシマリが警戒するように進む。

サキは、M27 IARを両手で持ち、もう一つのM27を腰辺りにかけて、いつでも出せる状態にいる。

「スター」

「それじゃあ、スターも行く」

シグレの合図と共に歩いて行く。

トリックとスターの距離は50m。

これは、集団で固まっていると、真ん中に撃たれた際の被害が大きくなるのを、防ぐための処置である。

雅一が前を歩き、シモハル、カエデ、最後にシグレと言う感じで行軍。

爆撃のよって、燃え下がる音のみが響き渡っている。

「それよりも、なんで俺が一番前なんだ？」

雅一の感覚は一番前「一番偉い、という感覚なので、疑問になる。

「それは後衛において、一番重要なのが、一番後ろだから、一番前はそこまでだよ」

シモハルが答えた。

「そうそう、そんなこと当たり前だよ」

「当たり前ですいませんね」

「フウッ」

「こら！ 一番後ろ！ 鼻で笑うな！！」

「こんな状況でも、そんなことが言えるのがすごいと思っただけ」

「そうか？」

それぞれの感覚が狭まって行く。

「絶体絶命って言う状況なのに、緊張感も何もない」

「褒めないでよ〜」

「いや、ハル。何も褒めてないよ」

「こんな空気もいいんじゃないか？」

「そうね」

『ああー、ああー、後ろの方々、何楽しいおしゃべりしてるのかな
〜？』

カノンからの無線連絡が入った、前を見ていると、こっちを見ている。

「こちら、スター2。後衛がいかに大事かと言うのを聞いてました」

雅一がふざけた感じで、真面目ぶった風に返す。

『はいはい、マサが、いかにバカかってことは知ってるから。それよりも警戒よろしくね』

「バカって失礼だろ！ バカって」

雅一が大声で言った時には無線が切れていた。

「くそっ！ 切りやがって」

「雑談終了。持ち場について」

シグレの一言で雑談が終了して、先ほどの隊列に戻る。

住宅街を抜けて、国道の通っている通りに出てきた。
そして、商店街などを少しずつ進む。

「しかし、リアルすぎだろ」

お店の看板には、一つ一つに固有名詞が入っており、現実さながらだ。

「たしかに、そうだよな」

後ろから来ていたシモハルが近づいて横に並ぶ。

「あんまり、気にしなかったけど、そう考えるとすごいよね」

「あんまり見てないのか？」

「うん、いつもは、チーム対抗戦だから、建物とか気にしないことが多いんだよ」

「そんな物なのか……」

「そんなもんだよ……」

「なるほど」

和みながら話していると、前の方で銃を発砲する音が聞こえてくる。

「何!？」

「何だ!？」

『こちら、トリック。敵と遭遇、数は約40。バックアップお願い』

「こちら、スター1。了解、全員、準備するわよ」

「あいあいさ」

「イエス、ママ」

「バックアップって?」

「いいから」

雅一は、わけのわからないまま、バックアップをすることとなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3966y/>

VRMMOFPSの世界でチートな主人公がチートな女性たちとクランを組んで。-

2012年1月5日20時54分発行